

大学生のための LGBTQ サバイバルブック Vol.2

# それぞれの結婚のカタチ

LGBTQ Student Booklet Vol.2

Marriage for All People



龍 谷 大 学



## まえがき

多くの人々が当たり前手にしている、愛する人と結婚する権利が認められていない人々が日本にはいます。愛する人が同性というだけで、結婚できないのです。先進7カ国の中で、国として同性結婚や登録パートナーシップ制度が認められていないのは日本だけです。同性パートナーシップ証明書を発行する地方自治体は少しずつ増えているものの、法的な効力は限定的なものにとどまっており、本当の意味での婚姻平等が達成されたわけではありません。また、今年のバレンタインデーには、同性結婚が認められないのは憲法が保障する婚姻の自由に反するとして13組の同性カップルが一斉に国を提訴し、注目を集めています。同性カップルが結婚できるというのはどういうことなのでしょう。同性カップルは結婚に何を求めているのでしょうか。もっと知りたいと思い、実際にアメリカで結婚している2組の夫夫を訪ねて、サンフランシスコのカストロ地区にやってきました。レインボーフラッグがあちこちに翻るこの街は、70年代に政治家のハーヴェイ・ミルクが活躍して以来、性的少数者の社会運動において重要な役割を果たしてきました。そして今でも、自由を求めて世界中から多くの人々がサンフランシスコにやってきます。今回座談会に参加してくださった卒業生の宮木リー啓輔さんとパートナーのトマス・ジョセフ・リー宮木さん、Marriage Equality USA のスチュアート・ギャフニーさんとジョン・ルイスさんには、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

この冊子は、LGBTQ 学生のライフプランのヒントにしてほしいという思いから生まれました。5人の当事者の就職活動と卒業後の人生をテーマにした前号「先輩たちのライフストーリーズ」を刊行後、英

語でも読みたいとの声を多数いただきました。要望に応え、今回は後半に英語もつけています。婚姻平等やカミングアウト、大学での当事者学生のサポートなどについて、龍谷大学関係者だけではなく、全国の大学生、教職員、家族、応援して下さるすべての方々が考えるきっかけになればと願っています。

2019年3月

吉本圭佑

## Preface

Most people take it for granted that they can marry the person they love. Yet, there are people in Japan who do not have equal rights for marriage. The reason they cannot get married is because they love someone of the same sex. Among the nations in the Group of Seven (G7), Japan is the only country that does not accept same-sex marriage or same-sex civil unions. Although the number of local municipalities issuing same-sex partnership certificates is gradually increasing, their legal validation is limited. So marriage equality has not been achieved yet. On Valentine's Day this year, 13 same-sex couples filed a lawsuit against Japanese government, arguing the country's rejection of equal marriage is a violation of constitutional rights. What does it mean for same-sex couples to be able to get married? What do same-sex couples want from marriage? In order to learn more about same-sex marriage, I visited two married gay couples in the Castro neighborhood of San Francisco. Visible with numerous rainbow flags flying in the wind everywhere, the Castro has been a symbol of the LGBTQ movement ever since the activist Harvey Milk fought for gay civil rights in the 1970s. Seeking freedom, many

LGBTIQ people move to San Francisco even now. I would like to take this opportunity to express my deepest gratitude to those who participated in the discussion: an alumnus of Ryukoku University, Keisuke Lee-Miyaki and his partner Thomas Joseph Lee-Miyaki, and Stuart Gaffney and John Lewis from Marriage Equality USA.

This booklet series was born in the hope of providing various role models for LGBTQ students. After publishing the previous volume about job hunting and the careers of 5 LGBTQ alumni of Ryukoku University, many people requested an English translation. In response to requests, I added English in the latter half of this volume. I hope that this volume will provide an opportunity to think about marriage equality, coming out and support for LGBTQ students for people not only associated with Ryukoku University, but university students, faculty and staff all over the country, families, and everyone who supports us.

March 2019

Keisuke Yoshimoto

# 大学生のための LGBTQ サバイバルブック Vol.2

## それぞれの結婚のカタチ

---

### 目次 Contents

	日本語	
座談会参加者紹介	.....	5
婚姻平等へのステップ	.....	7
伝統的な結婚式	.....	17
ロールモデル、ライフストーリーを語ることの重要性		23
国際同性結婚	.....	30
大学でできること	.....	33
ロールモデルとしての同性結婚	.....	36
	English	
Participants of the Discussion	.....	39
Steps toward Marriage Equality	.....	42
Traditional Weddings	.....	52
The Importance of Role Models and Sharing Personal Stories		58
International Same-Sex Marriage	.....	65
What We Can Do at University	.....	68
Same-Sex Marriage as Role Models	.....	70

## 座談会参加者紹介 (カッコ内は本文中での略称)

### Keisuke Lee-Miyaki 宮木リー啓輔 (啓輔)

サンフランシスコ仏教会開教師アシスタント兼チャプレン。2018 年カリフォルニア州立大学サンフランシスコ大学病院にてチャプレンインターンシップを修了。2012 年に HIV 陽性の診断を受けて以来、アジア系移民の性感染症予防ならびに LGBTQ のロールモデルとして社会への啓蒙活動を続ける。龍谷大学文学研究科真宗学専攻修了。2008 年から 2012 年まで本願寺尾崎別院及び本願寺広島別院安芸教区教務所に勤務。2016 年サンフランシスコ仏教会にて T.J. と国際同性結婚。

### Thomas Joseph Lee-Miyaki (T.J.)

サンフランシスコの HIV 陽性者リソースセンターにて総合健康分析プログラムのクライアントケースマネージャー。過去 25 年にわたりサンフランシスコにて、HIV 陽性者へのサポート、HIV 予防並びに LGBT の癌患者及び友人家族に対するサポートコミュニティ作りに携わる。サンフランシスコ HIV コミュニティ対策協議会評議委員。ライアン・ホワイト・HIV ケア協議会、高齢者及び障がい者用長期ケア調整協議会、ならびにアメリカ癌協会の LGBT の健康格差是正チームの元委員。サンフランシスコ HIV ケア協議会のプログラムマネージャーとして、シャンティプロジェクト、及びサンフランシスコエイズ基金勤務を経て、現職。

### Stuart Gaffney (スチュアート) と John Lewis (ジョン)

スチュアートとジョンはこれまで 15 年に渡り婚姻平等のムーブメントを牽引してきた。2004 年にアメリカで最初に法的に結婚した 10 組の同性カップルの 1 組となり、今では 30 年以上連れ添っていることになる。また、2008 年の歴史的な裁判で、カリフォルニア州に同性結婚をもたらした当

事者の1組でもある。長年に渡り Marriage Equality USA のリーダーとして携わり、国の内外を問わず多数のメディアに出演している。スチュアートの母は中国系で、Asian Pacific Islander Equality という団体の代表も務めている。現在は非営利の教育組織 Marriage Equality (<http://marriageequality.me>) を指揮している。大学やコミュニティのイベントで講演をする機会が多く、日本でも同性結婚や LGBTIQ に関する講演を行ったことがある。日本の非営利団体 Global Oneness の国際顧問であり、2018年のドキュメンタリー映画「愛と法」製作時の相談役も務めた。ジョンは弁護士で、スタンフォード大学ロースクール卒業。2013年と2015年の同性結婚の裁判でアメリカ最高裁に上訴趣意書を書いている。スチュアートはカリフォルニア州立大学サンフランシスコ校エイズ予防研究センタープロジェクト・ディレクターで、イエール大学卒業。パートタイムの映画監督でもある。

Keisuke Yoshimoto 吉本圭佑 (吉本)

編集・翻訳を担当。龍谷大学政策学部准教授。英国エセックス大学大学院言語学研究科博士課程修了。Ph.D. (言語学)。2018年度龍谷大学人権問題研究委員会助成人権問題研究プロジェクト「性的指向と性自認の多様性を認め合う大学を目指して」プロジェクトリーダー。人権関連の著書として、「LGBT から SOGI への意識転換の重要性 ～セクシュアルマイノリティに関する龍谷大学のアンケート結果から～」(龍谷大学政策学論集第7巻、2018年)、「セクシュアルマイノリティに対する龍谷大学の取り組み」(ねっとわ〜く京都 2018年8月号)、「HIV/AIDS について考えたことがありますか」(白色白光第20号、2018年)がある。龍谷大学は任意団体 work with Pride が実施する LGBTQ への取り組みの評価指標 PRIDE Index 2018 において最高評価のゴールドを受賞した。



カストロ地区のとあるカフェにて

2018年9月16日

### 婚姻平等へのステップ

吉本: 2018年9月現在、日本では9つの市と区が同性パートナーシップ証明書を発行していますが、法的な効力はありません。同性パートナーシップ証明書があると、病院の面会権が生じたり、携帯電話の月額プランの家族割引を受けられたりします。でも、その市や区から移住してしまうと、証明書は有効でなくなってしまう。法的拘束力がないんです。同性パートナーシップ証明書は2015年に東京都渋谷区からはじまりました。最近では、札幌市や福岡市、大阪市といった大都市でも同性パートナーシップ証明書を導入しています<sup>1</sup>。人々の意識は少しずつ変わってきていると思うのですが、日本で同性結婚が制度化されるにはまだ遠い道のりがあると感じています。今日は、アメリカでどのように同性結婚が認められるに至ったのか、その経緯を伺いたいと思います。

ジョン: まず、一番最初から、つまりカミングアウトについて話したいと思います。アメリカではカミングアウトのプロセスが非常に重要なんです。アメリカでのカミングアウトは、まず自分自身を受けとめて、最初のステップとしておそらく親友に話し、それから他の親しい友人に話し、それから家族に打ち明けるという非常に勇気のいるステップがあります。家族へのカミングアウトが難しいこともあります。おそらく世界中の人々にとって、家族の愛は大事なことから、そのセーフティーネットから、思い切って同僚に、近所の人に、

もっと多くの人にカミングアウトします。アメリカでは70年代に「カミングアウトしよう」という呼びかけで有名だったサンフランシスコ市会議員ハーヴェイ・ミルクによってカミングアウトの運動が起こりました<sup>2</sup>。彼は、皆が一斉にカミングアウトすれば、ホモフォビアや差別はすぐになくなるだろうと考えていました。しかし、もちろん、そんなに容易いことではありません。アメリカでも容易いことではありませんし、もちろん日本でも同じだということは理解しています。アメリカと日本では文化が違いますが、人間の深い経験としてカミングアウトがあるという点では一緒です。アメリカでも日本でも、カミングアウトは課題なのです。でも、カミングアウトの運動は少しずつ起こりました。ハーヴェイ・ミルク以前にも、60年代、さらには50年代にもカミングアウトする人々はいました。最初のレズビアン<sup>3</sup>の団体はここサンフランシスコで、2人の女性たちによって創設されました<sup>3</sup>。彼女たちは、勇敢にもカミングアウトし、「自分がレズビアンかどうかわからない人、自分のような人が他にいるかどうかわからない人でも集まれる場所を作ろう」と言いました。これが礎となりました。それから、より多くの人々が少しずつカミングアウトしていき、そこら辺にいるごく平均的な人でもゲイの知り合いがいるという状態になりました。最初の意図は、自分たちが幸せでありたいというものでした。彼らは内なる秘密を抱えていて、それが彼らを破壊しようとしていました。誰かを好きになる気持ちを秘密にすることは、アメリカ人にとって非常に難しいことです。それは、多くの鬱や辛い経験、もちろん自殺にもつながりました。なぜなら、当時の人々は本当の自分らしくできないと感じていたからです。だから、彼らは自分たちが幸せになれるようにカミングアウトしました。最

初は自分たちのためにカミングアウトしていたのですが、そのプロセスは、同時に多くの人々をも助ける結果となりました。これは、仏教の核となる考えとも関係していると僕は思います。苦しみから解放放たれて、基本的な幸福を手に入れ、幸せに生きること。仏教では、自分たちのためだけではなく、みんなのために悟りをひらきます。仏教の名のもとになされたわけではありませんが、LGBTQ の公民権運動はそういった考えを体現していると思います。ゲイであることを隠さなければならないことが多くの苦しみを生んでいたわけです。カミングアウトがその苦しみを軽減することに繋がりました。そして自分たちがカミングアウトすることで、他の人々の苦しみも軽減していたんです。1970 年代、特にゲイについて言うと、性的な解放がありました。自分らしく振舞って、パートナーと恋愛や性的な関係を持つこと。女性にとっては、女性団体との関連で、女性が完全に同等に尊重される人間であるという意識につながっていきました。LGBTQ の人々と女性との間には興味深い並行性があると思います。日本でも、女性と LGBTQ の人々は、社会の同等な構成員であるという戦いに立ち向かっていると思います。その後次第にゲイが可視化されるようになっていったのですが、その見方は狭いものでした。性的な人、近所にいるすごくユーモアのセンスのある人、いい体をした人、いい服を着ている人といったような見方です。ちょうど *Queer Eye for the Straight Guy* というテレビ番組で描かれているような感じでした。しかし、アメリカでは悲劇が起きました。世界中に HIV/AIDS が広まっていったのですが、アメリカのゲイの間では深刻でした。そして何かが劇的に変わったのです。それまで AIDS 患者で自身のセクシュアリティを隠していた人々の多くは、もう隠せなくなってし

まいりました。より多くの人々がカミングアウトし、真実を明らかにしました。それで家族との関係がひどくなって拒絶する家族もありましたが、ゲイをいたわる家族もありました。

スチュアート：そこで初めてアメリカがゲイの人々を不憫に思うようになったのです。ゲイがいたわりと愛と思いやりに値すると。

ジョン：その通りです。HIV/AIDS は重要なステップだったと思います。ただ単にパーティーやバーと一緒にいたりする友達や、セックスの相手としてではなく、ゲイ・コミュニティの中でお互いを思いやるということ学びました。なにしろ我々は危機的な状況にあって、誰も助けてくれなかったわけですから。人々が瞬く間に亡くなっていきました。我々のお互いへの思いやりは、今では皆にとって理想的なものとなったホスピスへとつながっていきました。アメリカは病気で死にゆくゲイたちを、思いやりの目で見はじめたのです。単なるパーティー・ピープルではなく、苦しみを共有できる人類であると。その感覚は次第に広がっていき、The NAMES Project の AIDS メモリアル・キルトに繋がっていきました<sup>4</sup>。最初は小さなプロジェクトだったのですが、国中の何百万という人々がゲイに人間性を与えたわけです。

スチュアート：それぞれのキルトが、その人の個人的なストーリーを物語っています。カミングアウトのプロセスと同じように、キルトは何千という人々の個人的なストーリーで、国中そして世界中の人々の心に触れたのです。

ジョン：それから同じ時期に、多くのゲイとレズビアン、特にレズビアンの女性たちは子どもをほしがっていました。家族がほしいと思っていました。同性愛者は家族を欲しがっていないという誤ったス

テレオタイプがありますが、実際には我々は子どもが好きですし、家族が好きです。そして、子どもを持ち始めるレズビアンもいました。その子どもたちは、他の子どもたちと何ら変わりありません。家族の保護という純粋な観点から、婚姻平等が必要なんです。LGBTQの新しい家族は、養子縁組、医療、学校など、子どもに関する様々なことで保護を必要としていました。もう一つ重要なことは、子どもたち自身が学校で気づき始めたということです。異性愛者の親を持つ子ども、ゲイの親を持つ子ども、レズビアンの親を持つ子どもがいるということに。そして親と子どもたちはこう問いかけました。ある子どもの家族が他の子どもの家族と同じように尊重されていないのはなぜか、なぜある子どもの家族だけが二級の家族なのか、もし親が亡くなったり、離婚したら、同じ保障が受けられるのだろうか、と。しかし、彼らには同等の尊厳がなかったわけです。そして、その時は一つのコミュニティに過ぎなかったのですが、ゲイたちも、HIV/AIDSに感染した人に同情するのは良いが、我々が本当にほしいのはこの社会における完全な人間性だと言っていました。ただ単に同情される近所の人というだけではなく、私はとても愛情深い人間なのだという感覚。完全なる複雑さをもった完全な人間であり、愛する人と真面目な関係を築いている。メディアではそういうことは取り上げられないから知らないかもしれませんが。メディアではステレオタイプしか見ません。ですから、このような事実が積み重なってきて、人々がこう言い始めました。我々は完全な結婚をする自由な権利がほしい。家族がほしい。一番大事なのは、我々の愛が他の人の愛と同等なものであるとみなされること。そして、いかなる人類も二級市民として他の人類を愛してはいないこと。いかなる人類の愛も他の人類の愛と比

べて劣っているわけではないこと。これはとても深いメッセージで、社会全体の学びでもありました。ですから、アメリカでは完全に平等な結婚が重要だったわけです。法の下での平等や子どものいる人々の保護、そしてまた移民の権利や医療保険といった点において。家族保険は法的な家族関係に基づいています。アメリカでは、1500 を超える権利と、責任や扶助が結婚許可証に付随してきます。そして、私の愛が他の人の愛より劣っているのではないということ、人間としての尊厳、我々が値する敬意が他の人々と同等であること、それらが保障されているからこそ、我々はこの社会の中で共に生きていけるわけです。こういった意識転換が積み重なって平等な結婚へと至りました。アメリカにおける LGBTQ の公民権運動について興味深いのは、運動に参加するほとんど全ての人が若いときに苦しんだ経験をしていることです。小学生の時、高校生の時、大学生の時なんか。我々は、受け入れられないかもしれないという内なる不安を抱えていました。僕自身はカミングアウトして自分らしく生きることが最初は怖くてできませんでした。そしてもしカミングアウトしなかったら、自分が壊れてしまうだろうともわかっていました。LGBTQ の公民権運動に参加した多くの人は、若い人々にとってよりよい世の中にしたかったのです。我々は、その苦しみを自分のこととして知っていたわけですから。若い LGBTQ の人に自分と同じ道を辿ってほしくなかった。自分たちの苦しみが再び起こらないようにという美しい動機ですね。とても長い回答になってしまいました。

**吉本:** ハーヴェイ・ミルクが活躍した時期に、人々がカミングアウトしはじめたということですね。Marriage Equality USA のウェブサイトを見ました<sup>5</sup>。婚姻平等を達成するためにはどうすればよいかと

ということが書かれていたのですが、コミュニティでの教育、ライフストーリーを語ること、メディアと効果的に接することなどがありました。しかし、これらはカミングアウトとセットになっていると思うんです。人々がカミングアウトすることが非常に難しい文化や社会では、婚姻平等はどのように達成されるのでしょうか。日本では、多くの人々はカミングアウトして非難されることを恐れています。そしていまだに人々はゲイに対して強いステレオタイプを抱えています。カミングアウトを伴わずに、婚姻平等を達成するにはどうすればよいのでしょうか。

**T.J.:** 僕が知っている多くの人々は、生きている間に同性結婚が可能になるとは思っていませんでした。僕が60代になったら可能になるかもしれないと思っていましたが、実際に同性結婚という制度が実現したのは僕が47歳のときでした。古い世代の政治家たちが入れ替わったら、10年毎に人々は少しずつよくなって前進していくのだというのが僕の考えです。怖いことですが、リスクを受け入れることも必要です。僕は13歳の時家族にカミングアウトしようと思っていたのですが、次の日にハーヴェイ・ミルクが射殺されてしまいました。ずっと自分を隠していくしかないのだと思いました。とても怖いことですが、チャンスを掴んで、勇気を出してやってみることで、人生が変わってしまうかもしれませんが、次の世代に進むために、時には自己犠牲も必要なのだと僕は見えています。

**啓輔:** 僕がサンフランシスコのLGBTQコミュニティで学んだのは、日本においていかに内在化されたホモフォビアが強いかということです<sup>6</sup>。文化的に、そして社会全体においても、多数派の人々と違ってはいけないという声なき声が聞こえます。それは大きな圧力

なんです。それに、小中高と多くの先生やクラスメイトたちも同性愛をセックスとだけ結びつけるようなジョークを言っていました。ゲイというのはアナルセックスをする人のことなんだって。だから、カミングアウトするのがとても怖かった。中学高校で、それについて何にも教わらなかったから。性的にとっても活発な非道徳な少年と他の人に見られたくなかった。だから自分の中にホモフォビアが内在化したのだと思います。ゲイである自分が嫌いだった。そして HIV 陽性であることがわかり、もっと自分のことを嫌いになりました。日本人は、性行為だけではなく、ゲイのすべての側面を尊重できるような手本が必要なのだと思います。ゲイの人々も普通の生活をおくっているのだということを示すモデルが。日本では、誰もが一般社会集団と違う人という風に標的にされたくないの、難しいとは思いますが。

**吉本:** アメリカと日本の違いは、日本がアメリカに比べてより均質な文化であるということだと思います。多くの日本人は、集団から目立ちたくないと思っていると感じます。これはセクシュアリティのことだけではなく、あらゆることについて言えることです。他の人々のようになりたい。多数派と同じでありたいと。なぜ日本で人々がカミングアウトしたくないかという、それが大きな一因なのだと思います。

**スチュアート:** 少し補足すると、カミングアウトに正しいやり方とか間違ったやり方というのはないと思います。変化をもたらす方法や、活動家としてのあり方に正解や間違いがないのと同じように。ただ、特に最初のステップとしては、安全なやり方でカミングアウトすることがとても大事です。ほとんどの人にとって、人生で出会ったすべ



ての人にカミングアウトするのは最初のステップとして得策ではありません。怖いですし、安全ではないからです。おそらく、多くの人にとってよりよい最初のステップは、信頼できる人、大事にしている人、非難しない人を一人選んでカミングアウトし、その人の前では本当の自分らしくできる関係性を構築して、うまくいけばそこからずっと成長し続けられるのだと思います。また、アメリカでも他の文化でもそうですが、変化をもたらす方法には色々あります。自分の立ち位置を活用する人も、かなりオープンにしても構わない人もいます。我々の文化では、コメディアンのエレン・デジェネレスのような非常に知名度のある人がカミングアウトして大きな変化をもたらしました<sup>7</sup>。それはみんながよく覚えている瞬間です。かなり時が経過した今でも、エレンのあのエピソードが流れた時、エレンがタイム誌の表紙で「私は同性愛者」と言った時、みんな自分がどこにいたのか覚えています。多くの人々にとって、エレン・デジェネレスのカミングアウトはアメリカ文化に一歩進んだ開放をもたらした重要な瞬間だったのです。しかし、公にカミングアウトすることは難しいと思っている人々もいます。でも、小さな変化は起こすことができます。会社で同僚を助ける指針を策定することもできます。近所や、町で変化を起こすこともできます。アメリカでは、同性パートナーシップを求めるべきなのか、同性結婚のみを求めるべきなのか、多くの議論がありました。両者の戦略はぶつかることもありました。同性パートナーシップを認めたら、同性結婚の実現が難しくなってしまうという人もいました。逆に、同性結婚のみを追求していたら、結果として何も得られないかもしれないという人もいました。しかし実際には、それぞれ異なった戦略で追求することによって、社会を変えるという同じゴ

ールに向かって近づいていったのです。そのようなすべての努力が、LGBTQ の人々やその恋愛関係についての気づきをもたらしました。エレンのカミングアウトのように、大きな波が一気に前進をもたらす瞬間がありました。アメリカにとって、そしてサンフランシスコに住んでいる我々にとって大きな瞬間だったのは、2004年2月12日です。当時市長だったギャビン・ニューサムが市庁舎のドアを開いて、女性と男性のペアでなくても結婚できると言いました。性別にかかわらず、2人の人間であるということだけが結婚するための条件でした。これはアメリカで同性カップルに与えられた最初の結婚許可証でした。30日間のことでしたが、世界中で大きなニュースになりました<sup>8</sup>。結婚できる唯一の機会かもしれないと思って、アメリカの46州と海外の8つの国々から人々がやってきました。雨の中夜通しキャンプをしている人もいました。この機会を逃したら、もう二度と結婚許可証が手に入らないと思って。僕とジョンは市庁舎に着いて、溢れんばかりの愛を目撃しました。結婚するカップルだけではなく、結婚をお祝いする人々もいました。人々の最高の瞬間を見られて、素晴らしかったです。カップルと赤の他人の両方が、愛情を示すためにあらゆる努力をする姿に感動しているようでした。少し離れたところに立って眺めている時、ジョンがこう言ったのを覚えています。「これは、カミングアウトの次のプロセスなんだ。ただ単にカミングアウトして『僕はゲイなんだ』と言うだけではなく、『僕はゲイで、この人を愛している』『僕はゲイで、これが僕の家族のあり方だ。僕はゲイで、この人と共に残りの人生を歩むんだ』と言っている」と。突如として、愛する人々が我々のムーブメントの象徴になりました。HIV/AIDS は初めてゲイの人々に対する思いやりやいたわりの気持

ちをもたらしましたが、今度は病気で死にゆく人々をいたわるという意味合いではなく、結婚する人々を祝福しようという意味で、アメリカ人の意識の変革をもたらしたと思います。それはまたゲイの人々にとっても大きな変化でした。「君たちは僕のことをお祝いしたいの？僕が結婚して嬉しいの？」と人々は本当に驚きました。ゲイの人々にとって、それは本当に素晴らしい結婚だったのです。

### 伝統的な結婚式

ジョン: 2004年2月12日の出来事的时候、僕たちは平等な結婚へのムーブメントに参加しようと決めました。サンフランシスコ市庁舎の階段で、平等な結婚への決起集会があると聞いたからです。この日は「自由な結婚の日」とも呼ばれています。スチュアートはランチ・ミーティングがあって参加できなかったので、僕だけが決起集会に参加しました。そこで、サンフランシスコで同性カップルが結婚できるようになったのだという素晴らしいニュースを聞いて、僕は驚き、圧倒されました。でも、もちろん一人では結婚できません。当時僕は携帯電話を持っていなかったで、スチュアートに電話をかけようと公衆電話のところに並んでいました。すると、ある女性が「ほら、私の携帯電話を使いなさい」と言って、携帯電話を僕にくれました。僕は赤の他人なのに。寛大さと信頼感がサンフランシスコに満ち溢れていました。親切は素晴らしいことですね。気分がよくなります。そして親切は伝染するんです。スチュアートが電話に出て、僕は何て言いました？

スチュアート：「今すぐ市庁舎に来て！早く！」というパニックで差し迫ったプロポーズでした。僕たちは、裁判所が結婚許可書を発行するのを中止して、この機会がいつ終わっても不思議ではないと本気で思っていました。時間がとても貴重だったのです。だからパニックになったんです。

ジョン：アメリカではそれまで同性結婚が法的に認められたことがありませんでした。スチュアートが市庁舎に到着して、僕たちは一步を踏み出しました。僕たちは運動に参加して、アメリカで最初に結婚した10組の同性カップルの1組になったのです。そう、最初の小さな一步を踏み出したのです。いつも学生に、興味のあることには参加しなさいと言います。なんでも構わないけど、特にLGBTQの権利についての運動には参加しなさいと。僕たちはそれまで17年間付き合っていました。今では31年間一緒にいることになります。「カリフォルニア州の権限に基づいて、あなた方の結婚を宣言します」というフレーズを聞いた時に僕は変わることができました。それ以前には、ゲイとしてどう頑張っても二級の人間なのだという思いが自分の片隅にありました。僕は何年もゲイであることをオープンにしていたのに、内在化されたホモフォビアや恥といった感情がまだ残っていたのです。そういったネガティブな考えをまだ持っていました。結婚した時、僕たち二人の愛が尊重されて、ゲイとして初めて同等な人類であると尊重された感じがしました。

啓輔：僕が結婚許可書を受け取りに市庁舎に行った時でさえ、違う色のものを渡されるに違いないと思っていました。

スチュアート：ラベンダー色とか。

啓輔：異性愛者と全く同じ結婚許可証で、とても驚きました。

ジョン: 2004年2月12日の出来事で可笑しかったのは、異性愛者のカップルと同性愛者のカップルに全く同じことをしていたので、市が僕たちに妊娠と家族計画の情報をくれたことです。

スチュアート: みんなに同じものをあげてたから。

ジョン: 大笑いでした。でも内心では「やった」と思いました。同等に扱われていると。

スチュアート: 僕の母は中国人なので、アジア系アメリカ人コミュニティの活動にも参加してきました。サンフランシスコ市庁舎での結婚式の翌年の旧正月に、ゲイアジア太平洋連合などの他のグループと協力して、サンフランシスコ市庁舎で結婚したアジア系アメリカ人の同性カップルを祝うパレードを開催し、山車を出しました。山車は文化的に適切なものになるよう細心の注意を払って、伝統文化に敬意を表した美しいものにしました。衣装も伝統的な中国の結婚式のものでした。1つだけ、新郎が2人、新婦が2人ペアになっているという重要な違いがありました。

ジョン: ほんのちょっとした違いだよ。

スチュアート: パレードが始まる時、山車に乗っているカップルや主催団体、山車と一緒にパレードを練り歩く人々はお互いにこう言っていました。パレードのルートにいるアジア系アメリカ人コミュニティの人々がどういう反応を示すかわからない。喜ぶかもしれないし、静かなままかもしれないし、敵意を示すかもしれない。どなってくるかもしれないし、物を投げつけてくるかもしれない。全てに対して心の準備をしておかなければならない、と。パレードが始まってチャイナタウンを通ったとき、ご婦人たちが並んでいるのが見えました。新郎同士、新婦同士のカップルに気づいて「おー」という表情を

していましたが、それだけでした。そして拍手とともに祝福の聲があがりました。全員ではありませんが、8割から9割の人々は祝福していたと思います。平等な結婚とは、どこか向こう側にいる他人の話ではなく、自分の娘や息子のことなんです。自分のいとこや近所の人、親戚や大切にしている人、自分の文化の中での知り合いが結婚するんです。

**啓輔:** コミュニティから受け入れられるのはとても重要なことです。僕が通っていたお寺で仏教の結婚式をすることにしたのもそのためです。僕はやっとな人間として、ゲイとして、コミュニティから認められたと感じました。劣った異質な人間としてではなく、僕もまた人間なのだ。ゲイで仏教徒でも問題ないのです。日本では、仏教教団と家父長制度がつながっていて、世襲権のある仏教僧イコール異性愛者ということになってしまいがちです。特に、日本の伝統的仏教教団ではそれが前提になっている組織形態がほとんどだと思いますが、実際はどうでしょうかね。アメリカに住んでいる以上、今僕は家父長制度の中で生きているわけではありませんが、全く問題ありません。僕は仏教徒でゲイでもある。コミュニティが受け入れ、祝ってくれたのですから、全く問題ないんです。人種年齢性別宗教にかかわらず、200人近くの人たちが僕たちの結婚式に来てくれました。お寺のメンバーたちは皆「おめでとう」と言ってくれました。

**T.J.:** お寺全体が幸せなムードでした。面白かったのは、結婚式の数日前初めて啓輔のお母さんとお姉さん、甥と姪に会うとき、啓輔は「今言わないと」と言いました。僕は「何を言うの？」という感じだったのですが、僕がゲイだとカミングアウトするということでした。「なんでみんなに会う10分前にそんなことを言うの？」と思いまし

たが、結局啓輔は「おじさんは男の人と結婚するんだよ」と言いました。そしたら彼の甥と姪は「男の人と結婚できるの?」と聞きました。

**啓輔:** 僕の姪は「なんで?」と聞きました。姪は7歳でした。僕は子どもにカミングアウトすることを非常に恐れていました。僕の頭の中には、ゲイは性的な存在だという風に見られてしまう怖さがありました。30年間日本で生きてきて何度もそういうメッセージが内在化されていたからです。だから「子どもに言っても大丈夫なの? 僕がゲイで結婚するってどう子どもに言えばいいの?」と聞いていました。

**T.J.:** 僕は「結婚式のとくにどうせわかるでしょ」という感じだったので。僕の姪はすごくいい子でした。結婚式の日、僕たちは手を繋がないようにしていました。その日の最後に、僕の姪が僕たちの手を掴んで、「愛し合ってるんだったら、手をつなごうよ」と言いました。僕の甥と姪は本当にいい子たちで、僕たちがゲイだってことを全く気にしませんでした。

**啓輔:** 幸いなことにまだホモフォビアを見聞きしていなかったからだと思います。

**ジョン:** お二人がどれだけ家族を尊重しているかが伝わってきますね。家族のことをとても気にかけていたのですね。苦しんでほしくない。家族が大丈夫であってほしかった。もちろんお二人は大変だったでしょうが。家族に対して公正で、尊重する姿勢が素晴らしいと思います。

**啓輔:** 僕の叔母と姉にどうカミングアウトしようか悩んでいたことも思い出します。お寺のメンバーや友人たちはみんな「大丈夫だよ。今メールか携帯で言っちゃえばいいのに」と言いました。でも、もし

拒絶されたらどうしようと思って怖かったのです。日本とアメリカでは地理的な距離もありますし、いざ拒絶されたらその後どう対応すればよいかわからなかったのです。結局大丈夫だったのですが、当時は相当恐れていましたね。

ジョン: 姪がお二人の手を繋がせたというのは本当に美しいお話ですね。家族の愛を感じます。啓輔さん、家族にカミングアウトしたときの反応をもう少し聞かせてもらえますか?

啓輔: 2006年に僕の母がこう聞いてきました。「啓輔、男の人と付き合ってるの?」と。僕は「お母さん、冗談やめてよ」と笑ったのですが、母は「真面目に答えて」と言いました。僕は回答を避けていましたが、最終的には、京都にいたときからの男の人と付き合いっていたことを認めました。母は泣いて、「孤独だから男の人と付き合いようになったのね」と言いました。その時点では、母は自分の息子が男性同士の関係を持っているという事態に納得していなかったのだと思います。同性愛は治るものだと思っているようでした。それから母は父にも勝手に話してしまいました。2007年か2008年だったと思うのですが、母が父に僕のセクシュアリティをアウトティングして、僕は実家のお寺からゲイであることを兄姉含め公にはしないよう言い渡されました。父もまた、僕がゲイであるという現実には驚いたのだと思います。また、当時僕は本願寺でつらい思いをして、とても絶望的な気持ちになっていました。でも、ゲイとして築いてきた人間関係を他の人に認めてもらいたかった。僕にとってとても大切なことだから、嘘をつきたくなかったんです。2015年ごろ、T.J.と結婚することを報告するのは非常に勇気がいりました。父に手紙を書きましたが、返事は受け取れませんでした。でも、大丈夫です。それもまた思いやりの形だ



と僕は信じています。非難するのではなく、沈黙をつらぬくことが。僕たちは仏教式の結婚式をあげました。コミュニティと調和できるように、仏教の伝統的な文化を尊重しました。だから、たくさんの日本の寺院の人々が認めてくれたのだと思います。中にはかなり保守的な人々もいましたが、仏教の伝統に則って、T.J.は着物を着ましたし、僕は仏教の袈裟を着ました。式のコンドクターは住職で、お経もとなえました。

**T.J.:** 僕の着物姿を見た時の義母さんの表情を写真にとっておきたかったです。義母さんの表情が美しかったので。僕たちは結婚式の前の日に着物を着ることを伝えたのですが、義母さんはとても興奮していました。僕がスーツを着るのだと思っていたみたいです。披露宴のために洋服から着替えて、僕たちは両方着物を着ました。コミュニティホールでは、酒で乾杯しました。学校の子どもたちが野球帽を2つ作ってくれたのですが、一つが新郎用でもう一つが新婦用だったのがすごく可愛かったです。僕たちはその帽子もかぶりしました。帽子はまだとってあります。

### ロールモデル, ライフストーリーを語ることの重要性

**T.J.:** 今多くのムーブメントが起こっていますが、ナショナル・カミングアウト・デーと同時期に始まったもので印象的なのがゲイ・マネー・デーです。ゲイの人々がコミュニティに寄付して、当日どれだけのお金が集まったのかがわかります。誰もゲイの知り合いがいないという人との境界をなくすことができ、うまくいっていると思いま

す。

**吉本:** ナショナル・カミングアウト・デーとはどのような日なのか？

**T.J.:** 毎年10月11日で、友達や家族にカミングアウトする日です。ムーブメントとして始まったもので、少しずつカミングアウトの壁をなくしてきました。おかしいのは、人間という種にだけ LGBTs がいると思っている人々もいて、人間が生まれつき LGBT ではないという理論もあることです。ですが、すべての動物に LGBT がいるのであって、人間という種だけが他の動物と完全に異なるなんてことがあり得るのでしょうか。

**ジョン:** 同性愛が観察されている動物は1500種いますよね。ナショナル・カミングアウト・デーには、学校がよく LGBTQ ウィークを開催したりします。ゲイであることをオープンにしている学生が語って、他の学生が質問したり、ゲスト・スピーカーを招いたり、映画を上映したりします。たくさんの方が行われています。

**スチュアート:** カリフォルニア大学サンフランシスコ校では、すでにカミングアウトした人々が話をしていました。「あなたのカミングアウトはどうだったの？僕もカミングアウトしようと思っているけど、あなたの例から学びたい」と人々は聞き入っていました。

**T.J.:** カミングアウトの話でいうと、僕は HIV 陽性であるということもカミングアウトしなければなりませんでした。それはセクシュアリティのカミングアウトととても似たプロセスでした。HIV 陽性の人々と一緒に働いていたことがあるのですが、まず安全な場所を見つけることが大事です。一気に家族全員に言わなくてもいいわけです。家族に話すのは、自分自身が受け入れることができたときがよい

のです。

**啓輔:** 結婚式の後、僕が HIV 陽性であるとカミングアウトしたときのことを思い出します。僕はまずゲイであることをカミングアウトして、次に結婚することをカミングアウト、最後に 2018 年に HIV 陽性であることをカミングアウトしました。

**T.J.:** カミングアウトのプロセスには時間がかかることもあります。努力も必要ですし、カミングアウトには様々な側面があるのです。

**啓輔:** サンフランシスコに移住してから、カミングアウトのプロセスに他の人々の手本がとても大事なのだということを学びました。サンフランシスコの AIDS 基金に行って、他のゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの男性たちと話や経験を共有しました。彼らの性自認は多様で、悩んでいる人もいましたし、一方でゲイで HIV 陽性であるということにとっても自信を持っている人もいました。人種も年齢も、いつどのように HIV に感染したのかもバラバラでした。でも彼らは話を聞き、僕も彼らの話に耳を傾けました。そうすることで、気持ちが楽になりました。人々の手本がなかったら、僕はきっと孤独だと感じていたでしょう。ゲイで日本人で HIV 陽性であることに苦しんでいるのは僕だけだと。3つの重荷が肩にのしかかっていたのです。他の人々が似たような経験をしているということを知り、経験を共有することで、僕は変わることができました。

**吉本:** それはいいことですね。学生はよく日本にはロールモデルがないと言っています。日本にはエレン・デジェネレスのような人はいませんし、有名人はカミングアウトしません。学生たちは将来が描けず、怖がっています。ロールモデルを示すために、このインタビューのような活動をしています。

ジョン: ロールモデルは非常に有効だと思います。日本の大学でカミングアウトと平等な結婚についての講演をした時、その大学にはサポートを提供しているセンターがあったのですが、僕たちと個人的に話をしたいという学生がいました。彼女はセクシュアリティについて悩んでいました。友達や家族に話したいと思っていたのですが、とても怖がっていたのです。僕たちがやったのは、ただ彼女の話に耳を傾けることでした。まず、彼女が自分の経験を語れるように聞きます。何が彼女にとっての真理なのか。聞きながら、どんなアドバイスをして、どんな手助けができるのか考えます。僕がやったのは非常にシンプルなことで、ただまっすぐに彼女を見てこう言いました。「あなたはそのまま素晴らしい。変わる必要はない」と。それは一種の奇跡的な瞬間で、彼女の目に涙が浮かんでいるのが見えました。我々同性愛者が、自分は大丈夫じゃない、劣っているという感覚を持っているのは普遍的なことなのだと僕は思います。そして、あなたは素晴らしい、あなたの愛はそのまま素晴らしいと言ってくれる誰かが必要なんです。自分自身に対してもそう言う必要があります。それから、彼女は家族に打ち明けたそうです。次の年、彼女は東京レインボープライドにいました。学生のLGBTQサークルに所属して、自分自身を受け入れて、自信を培っている最中だったのだと思います。昨年大阪で講演をした時、京都の曼殊院に行きました。日本のことわざで「出る杭は打たれる」と書かれてあったのですが、その下に、今まで聞いたことがない「出ない杭は地中で腐ってしまう」という意味のことが書かれているのを発見しました。これは普遍的な課題なのだと思います。カミングアウトのリスクをおかさないで、自分自身を傷つけてしまうことにもつながります。旧正月やあなた方の結婚式の

話を聞いて思ったのは、我々が伝統文化に敬意を表しているということ。我々はこの文化の一部なんです。ゲイであることはみんなが思っているように文化に反することではないのです。アメリカの文化やクリスチャンであってもそうです。日本について言うと、我々は、まわりに合わせるという協調主義的な伝統文化全体の一部を成しているわけです。そして、ちょっとぐらいまわりと違っていても構わないんです。ゲイであるということは、確かに多数派とは少し異なっているでしょう。でも、日本人の友人から聞いたところによると、LGBTQ だけではなく、多くの日本人が同じことで悩んでいるのではないのでしょうか。実際、多くの人はいくらか期待されていることとは少し異なっているものです。そういう点で人々は共感できるのではないのでしょうか。「愛と法」という映画では、様々な点で異なりに対する共感が描かれていました<sup>9</sup>。

**啓輔:** ただ、安全性が重要だということは強調しておきたいと思います。僕の日本人の友人でサンフランシスコで同性結婚をした人がいます。でも、両親にカミングアウトした時、彼らは僕の友人を殺そうとしました。コミュニティや社会に対してカミングアウトをすることは時にとても危険なことでもあります。だから、ゲイの人みんなにカミングアウトを押し付けることはできません。

**ジョン:** 何人かの日本人が、カミングアウトでひどいことが起こったと言っていました。啓輔さんが家族関係で苦しんでいたように。でも、不安が現実よりもひどい影響をもたらすこともあります。不安は確かに僕の心をむしばんでいました。僕は家族に怯えていましたが、受け入れてくれました。不安のせいでがんじがらめになっていないかどうか、考えることが重要だと思います。

**吉本:** さっきスチュアートが言っていたように、カミングアウトする相手は家族である必要はないと思います。信頼できる人にカミングアウトしてから、他の人にカミングアウトすることもできますよね。そうすることで、少しずつ受け入れられたと感ずることが出来ます。

**T.J.:** ナショナル・カミングアウト・デーの話に戻すと、僕が80年代に大学生だった時、LGBTデーというのがありました。LGBTの人々、支援する異性愛者の人々がみんな紫色のシャツを着るという日です。誰がゲイで誰が異性愛者なのかわかりません。キャンパスにおいて、もっと多数派から見える存在にするというのが目的です。日本にいた時、東京で仕事に行く男性がみな白いシャツを着ているのに驚きました。だから、ほんの小さなことでも、例えば小さいピンバッジなんかから始めてみるといいかもしれません。

**スチュアート:** ピンクのトライアングルのバッジなんかどうでしょうか<sup>10</sup>。

**T.J.:** さりげないことでいいんです。僕もロールモデルがとても大事だと思います。僕が子どもの頃、テレビでゲイの登場人物は2人しかいませんでした。異性愛者の男性が2人の女性と家をシェアして家賃を浮かせるために女性っぽいゲイを演じているというひどいものでした。その当時のテレビではレズビアン<sup>11</sup>の登場人物はいませんでした。HIV/AIDSが広まると、テレビでゲイの登場人物がいるとすれば、その人はHIVに感染して死んでしまうというようなものでした。彼らは誰とも交際したことがなく、いつもシングルという設定でした。たった一回不運なセックスをしただけで、HIVに感染してしまふ。そんな話ばかりでした。また、カミングアウトについて言うと、友達や家族の中に拒絶する人がいたとしても仕方ありません。そ

れで大丈夫なんです。僕たちは「自分で選んだ家族」を作っていけるのです。自分の人生の中で出会った人たちと一緒に。自分で選らんだ人々の方がより強い絆で結ばれることもあるのです。

スチュアート：東京のとある教授のクラスで僕たちは招待講演を行いました。翌週、教授は学生にリアクションペーパーを課題として提出させ、僕たちに送ってくれました。そのうちの一枚が明らかにカミングアウトの話でした。彼は僕たちの話を聞いた後、クラスの他の学生の前で自分が在日コリアンであることをカミングアウトしようと思ったと書いていました。結婚しているゲイの男性がアメリカからやってきて自分らしさについて話してくれたのだから、自分も同級生に話せるだろうと書いていました。彼は自分が在日コリアンであると気づかれたことがなく人生を過ごしていました。だから、カミングアウトしなければならない理由はなかったわけです。でも、彼は嘘をついて生きていると感じていました。彼は本当の自分でいたかったそうです。そして、彼はクラスの同級生にカミングアウトしました。教授によると、その時の授業は素晴らしかったそうです。これは一例ですが、僕たちの話をただ単にゲイの話として聞いたのではなく、自分に正直であることについて、より広いメッセージを受け取ってくれたのだと思います。本当の自分らしく最大限に人生を生きられるということがどういうことなのかについて。

ジョン：僕たちは二人で一緒に話しました。僕たちは外の文化から来ているので、個人的なことについて話しても大丈夫だろうと思っていました。おそらく、それが少しだけ開放的な空気をもたらして、より個人的なことについて話せると思ってくれたんだと思います。異文化の機会からは学ぶものがあります。別の文化ではもっとオープン

ンになれるのだと思います。

**啓輔:** 会話のきっかけとして個人的なライフストーリーを語ることが非常に重要だと思います。僕が2017年8月に龍谷大学で講演を行った時、最後に質問を受けました。そのうちのいくつかは、同性結婚と仏教教義との整合性についての質問でした。そういった質問も大事なかもしれませんが、学術的なことについて話すよりは、まず個人的な経験の分かち合いから始める必要があると思います。そうでなければ、真実味が失われてしまいます。これは僕の意見です。

### 国際同性結婚

**T.J.:** 日本での同性結婚について話を戻すと、いつかは実現するのだろうと思います。アメリカと同じスピードで実現するかどうかはわかりませんが。「ハーフ」という映画を観ましたが<sup>11</sup>、日本では両親が両方とも日本人でないと、アパートを探すのも大変だという現状があります。映画の中では、エチオピア出身の男性と、両親の片方が韓国にルーツを持つ妻が出てくるのですが、彼のルーツがアフリカだということがわかると、とたんにアパートに入居できなくなってしまうのです。だから、同性結婚以外にも多くの課題があるのだと思います。でも、日本のお隣の台湾で同性結婚が認められようとしているのを見てください。日本に行ったとき、啓輔と手を繋いでいると、僕たちのことを見てくる人々がいました。僕が外国人であることがわかると、敵意の眼差しでジロジロ見てくる人もいましたが、気にせずただ視線をそらす人もいました。日本人はときどきとても直接的



なことがあります。でも、僕にとっては大したことではありません。日本では、それで強盗にあったり、襲われたりするわけではないとわかっているからです。

ジョン: 日本にいる時、我々は白人あるいは親のどちらかが白人である訪問者として、ある種の特権があるのだと思います。僕が日本に行った時は、可能な限り自分がゲイであることをみんなに伝えました。みんながどんなことを言うのか学びたかったからです。僕は日本に住んでいるわけではないので構いません。それに日本人は銃を持っていませんから、攻撃されないとわかっています。ある意味興味深い経験でした。僕は京都のあるレストランにいたのですが、かいつまんで話すと、日本人の夫婦と僕がいて、彼らが「日本に何をしにきたのですか？」と聞いてきました。僕は「同性結婚の講演をしにきました」と答えました。女性がとても驚いて「おー」と言ったのを覚えています。同性結婚の話は何度も繰り返はしませんでした。僕に夫がいるということは明らかでした。僕たちは茶道の話始めて、後日旦那さんが家でのお茶会に招待してくれました。お茶会の最後に奥さんからプレゼントを頂いたのですが、可笑しかったことに、それが女性用の財布で、「奥様に渡してください」と言われました。旦那さんが僕がゲイだということを説明すると、奥さんは「お母様に渡してください」と言いました。面白いですね。彼らはゲイの人と実際に出会ったわけです。もし次に会うことがあれば、彼らは少し変わっているかもしれません。

啓輔: 僕はまだ実家のお寺の後継なのですが、もし僕たちが日本に戻ってお寺を継ごうとすると、今の T.J. のビザでは日本に 3 ヶ月以上滞在できません。

**T.J.:** 僕たちのお寺は日本で最初のゲイ寺院になるでしょう。

**ジョン:** 台北にもオープンリー・ゲイの寺院があるのですから、いいではないですか。

**T.J.:** 僕たちは何人か啓輔のような、祖先から伝統を受け継いでいる人に会いました。家族に恥をかかせたくないからゲイであることを隠していて、異性と結婚していました。

**ジョン:** 法的に結婚している夫が日本に3ヶ月しか滞在できないというのをどう感じますか？

**啓輔:** 憤りを感じています。でも複雑な心境です。僕はまだ不安だからです。日本の仏教界からまた拒絶されたくありません。日本で権利を主張するのが怖いのです。ハラスメントがトラウマになっているからです。男性の同僚とホステスクラブに行かなければならなかったり、何度かお見合いの話も持ち込まれました。僕が広島のカバーに詳しいことを知ったある同僚が他の人々に僕のセクシュアリティを暴露してしまいました。そして僕は日本を後にしました。でも、ここでは違います。米国仏教団は、性自認や性的指向の多様性を人権として認識しています。もっと思いやりがあります。米国仏教団自体が日系アメリカ人として政府の差別を経験してきたからだと思います。歴史がマイノリティに対する態度を変えたのです。

**ジョン:** そうですね。LGBTQ 関連ではない団体として、アメリカで最初に同性結婚支持を表明したのは、アメリカ自由人権協会以外では、日系アメリカ人市民同盟が最初でした。啓輔さんが言ったように、自分の経験として、疎外されたり、虐げられるということがどういうことか知っているからだと思います。もし啓輔さんが女性と結婚していたら、妻として一生日本に滞在することができるのですよね？

あなたがゲイで男性と結婚しているから、T.J.は最長で3ヶ月しか日本に滞在できない。その不平等について、どう感じていますか？

**啓輔:** とても悲しいです。結婚した時、在サンフランシスコ日本国領事館にパスポートの名前を変更したいと申し出たのですが、日本では同性結婚が合法ではないからと断られました。

**T.J.:** 日本に行く時、啓輔は日本のパスポートを使って、アメリカに戻る時はグリーンカードを使っています。

**啓輔:** 僕はまだ日本政府に対して権利を主張する心の準備ができていません。遅かれ早かれ僕の父は引退するので、僕がアメリカにとどまるのか、T.J.と一緒に日本に戻るのか決断しなくてははいけません。

**ジョン:** でも、啓輔さんは自分のライフストーリーを語ることによって静かに支援しているのだと思います。僕が今聞いた感じだと、啓輔さんは日本での相続・伝統・自分の家族、あるいは自分らしくあることのどちらか一方を選択しなければならないのですね。そして、両方が同時に実現できればと思っている。

**啓輔:** 家族は僕の結婚とセクシュアリティを受け入れてくれているのですが、コミュニティや日本社会が同じように受け入れるかは疑問です。暴力によって差別しているというわけではありませんが、沈黙によって差別したままなのです。

### 大学でできること

**吉本:** この2、3年、龍谷大学は多くのスピーカーを招いてきました。啓輔さんも講演してくれました。龍谷大学のキャンパスには今65カ

所ジェンダーに関係なく使える「だれでもトイレ」があります。LGBTQの学生団体もあります。性自認や性的指向を理由にした差別をなくすための指針も策定しました。LGBTQの学生、教職員に対して大学ができることはありますか？

スチュアート：僕の大学で可視化と安全性を高める良いやり方があったか考えてきました。僕は34年前大学生でした。セクシュアリティのオープン度合いにかかわらず、ふさわしい活動があります。例えば、カミングアウトしていない人にとっては、目に見える教員がいるということが心強いものです。エレン・デジェネレスのような有名人のロールモデルではありませんが、それでもオープンリーゲイとして働いている人がいるということを示すロールモデルではあります。僕が学生だった頃、ゲイの教員がいたことにとっても励まされました。中世の同性結婚についての研究を出版している教員で、彼の存在がある種の安心感を与えてくれたと思います。学生新聞にLGBTQに関するプログラムや話題が取り上げられたりもしていました。カミングアウトしていなくても、学生新聞を読むことはできます。そしてこのキャンパスに自分の他にもゲイの学生がいるのだということを知ることができます。もう一つの安全なやり方は、スピーカーを招くことです。講演が新聞や学内のポスターに掲載されるかもしれません。講演に参加することもできますし、参加すること自体が怖くてできないという人もいます。でも、ゲイの著者が大学に来るということは知ることができます。可視化を進めるやり方には色々あります。大規模なものから小規模なものまで、色々なやり方で参加が可能です。セーフ・スペースで他のゲイの学生と会ったり、カウンセラーと話したりするのは、よりプライベートで安全な活動です<sup>12</sup>。例

えば、ゲイの学生のためのディスカッショングループや読書会を催すこともできます。本を読んで、自分がどう感じたかディスカッションするのです。映画の上映会もやっていました。もっとオープン度の高いものとしては、集会や祝賀会などがありました。一緒に色々な活動もしました。大学の医療サービスに問題があって、請願書を書いて署名運動をしたこともありました。これらは非常に目に見える活動です。他には、「ゲイ・ストレート・ディスカッション」というのもやりました。そのディスカッション・グループでは、話をしたい人が自分の話をして、異性愛者の人もゲイの人に「ゲイとして大人になる過程はどんなだった？」といった質問をするというものでした。話をする人にとってはとても可視度の高い活動ですが、聴衆の中にいれば、後ろの方に座って一言も喋らず、ただ観察することができます。非常にプライベートなものからかなりオープンなもの、またその中間ぐらいのものまで、大学でできることには色々あります。

**啓輔:** カリフォルニア大学サンフランシスコ校でチャプレンのインターンをしていた時、セクシュアルハラスメントや性自認についての複数回にわたる長いオリエンテーションがありました。新入生や新しく雇用される教職員の多様性に対する感受性を高め、他でもない自分たち 1 人 1 人の課題であるという意識を構築することがとても大事です。龍谷大学へのささやかなアドバイスです。

**ジョン:** 支援を表明するバッジをつけることもできます。「僕はゲイだ」ということを示すバッジではなくて、支援を表明するもの。ナショナル・カミングアウト・デーではみんな支援します。キャンパスで人々が LGBTQ の人々に支援を表明する日を作ることができますね。

**啓輔:** インターンシップで働き始める前に必須のオンラインコース

もありました。そのコースを終えなければ、働き始めることができません。そのセクシュアルハラスメントのコースを終えるのに6、7時間かかりました。主には、訴訟事件のケース・スタディと、加害者・被害者双方がどのように歩み寄って解決していくかといったオンラインツールでした。

スチュアート：段階があるのだと思います。1980年代に僕の大学では、学生のグループが執行部に話をして、職員の雇用や学生生活、学業等すべてにおいてセクシュアリティを理由にした差別禁止の公式な指針を採用するよう働きかけていました。最初人々はこの大学は絶対にそんなことはしない、時間の無駄だ、クレージーだと言っていましたが、何年か後にはそれが実現したのです。

### ロールモデルとしての同性結婚

吉本：同性結婚を合法化することは、若い世代にとってのよいロールモデルになると思いますか？

ジョン：はい、そう思います。アメリカではハーバード大学とジョンズ・ホプキンス大学が出版した10代の自殺未遂を分析した研究結果があります<sup>13</sup>。2015年に全米で同性結婚が認められる前に同性結婚を先行導入していた州とそうでなかった州の経年変化を比較調査したものです。それによると、同性結婚が認められた州では、高校生の自殺未遂が134000件(7%)減少したそうです。婚姻平等に関する尊厳と尊重の話に戻りますが、同性を愛するということが法的に平等に扱われることによって、自分らしくあることと自分が愛する人が

疎外されていないという感覚を持つことができ、若い人たちに幸福感をもたらしたのだと思います。

スチュアート：結婚したとき、僕たちは17年間付き合っていました。友人や家族はみんな僕たちのことをカップルとして知っていたのですが、結婚がもたらした影響はとても面白いものでした。結婚した時に何かが変わったのです。プレゼントをくれる人、お祝いしてくれる人もいました。結婚してどう変わったのか知りたがっている人もいました。何人かが言っていたことで、とても驚いたことがあります。僕の弟はジョンのことを小さい時からずっと知っています。僕たちが結婚したとき、ある日みんな夕食の席についていたのですが、弟がすっと立ち上がってジョンのところに歩いて行き、「あなたは今僕のお義兄さんなんだ。お義兄さんができたんだ」と言って、ジョンをハグしました。ジョンが家族の一員になったのだと。僕の家族はずっとジョンのことを受け入れていたにもかかわらず、結婚がとても深い変化をもたらしたのです。結婚するカップルだけではなく、カップルの人生に関わっている人々にも変化をもたらしました。同性結婚が意味することについて、人々はたくさんのことを学んだのだと思います。とても理解がある人でさえ、結婚できるか否かの違いが何か考えたことがなかったようです。異性愛者の人々は結婚について考えることがなく、ただするものだからです。突然人々が僕たちに聞いてきました。「結婚すると何が得られるの？我々も結婚したけど、何が手に入ったのかわからないんだ」と。結婚には1138の連邦政府の権利が付随してくる、と僕たちは説明します。僕たちが彼らに結婚について教えているのです。彼らはゲイの友人が結婚できるのか否かということが何を意味するのか考えたことがありませんでした。国

中が同性結婚を経験することによって学んでいたと感じます。同性結婚に対する賛成と不賛成の世論調査は、約 30%が賛成で 70%が不賛成というところから完全に逆転し、今では国中でほとんど 70%が賛成しています。その逆転劇は非常にはやく起こりました。結婚できるようになって、実際に見えるようになったので逆転劇が起こったのです。「私の隣人が結婚した。いところが結婚した。おじさんが結婚した。上司が結婚した」というように。ハーヴェイ・ミルクが言っていた、全員が突然カミングアウトして紫色になったら偏見や差別がなくなるという考えが実現されたということです。日常生活の中にどれだけたくさんの同性愛者がいたのかということにみんなが突然気づいたのです。日常生活の中で、こんなにたくさん結婚する同性愛者がいるということに人々は気づいていなかったのです。

**吉本:** 同性結婚が可能になって、より可視化が進んだということですね。

**スチュアート:** そうです。もっと現実味のあるものとして受け取られるようになりました。

**ジョン:** 日本でも法律がいくらか変われば、物事がよりはやく変化するという望みがあります。



## Participants of the Discussion (Abbreviations in the Main Text)

### Keisuke Lee-Miyaki (Keisuke)

Keisuke Lee-Miyaki is a minister's assistant and chaplain at the Buddhist Church of San Francisco (BCSF). He completed his Clinical Pastoral Education in 2018 at the University of California, San Francisco. He was diagnosed HIV Positive in 2012 and lives as a public example against stigma. He has a Master's degree in Shin-Buddhist Studies from Ryukoku University. From 2008 to 2012, he worked as a Honganji priest/staff at Osaka Ozaki Betsuin and Hiroshima Betsuin. Keisuke married his husband, T. J., at a multi-denominational international Buddhist wedding at BCSF in 2016.

### Thomas Joseph Lee-Miyaki (T.J.)

T.J. Lee-Miyaki is an Interventionist in the Integrative Health Analysis Program at Positive Resource Center. He has been a part of the HIV Positive and HIV Prevention and LGBT Cancer communities in San Francisco for over 25 years. He is in his second term as a Council Member of the SF HIV Community Planning Council, a former two term Ryan White CARE Council Member, a former one term member of the Long Term Care Coordinating Council and a former four term member of the American Cancer Society's CA LGBT Health Equity Team. He has worked at Shanti Project, San Francisco AIDS Foundation and served as the Program Manager for the SF CARE Council. He has volunteered at Project Open Hand, Shanti, SFAF, AIDS LifeCycle and Healing Waters Wilderness Adventures.

Stuart Gaffney (Stuart) and John Lewis (John)

Stuart Gaffney and John Lewis have been two of the leaders of the marriage equality movement for 15 years. Together as a couple for over 30 years, they were one of the first ten same-sex couples to marry legally in the United States in 2004 and were one of the parties in the historic 2008 lawsuit that brought same-sex marriage to California. For years, they were leaders of Marriage Equality USA and have appeared many times in national and international media. Their family is mixed race Chinese and European American, and Stuart and John were also leaders of the organization, Asian Pacific Islander Equality. They now direct the non-profit educational organization Marriage Equality, <http://marriageequality.me>.

Stuart and John often speak at universities and community events. They have traveled to Japan to give talks on marriage and LGBTIQ equality on multiple occasions and have met with numerous Japanese activists. John and Stuart are international advisors to the Japanese nonprofit Global Oneness which promotes LGBTIQ understanding in Japan. They also consulted on the 2018 Japanese documentary “Of Love and Law.”

John is a lawyer and wrote briefs to the United States Supreme Court in the 2013 and 2015 marriage equality cases. He graduated in the top 10 percent of this class from Stanford Law School in Stanford, California. Stuart is a Project Director at the University of California, San Francisco Center for AIDS Prevention Studies and a part-time filmmaker. He is a graduate of Yale University.

Keisuke Yoshimoto (Yoshimoto)

Keisuke Yoshimoto is Associate Professor of Linguistics in the Department of Policy Science at Ryukoku University in Kyoto, Japan. He obtained a PhD in Linguistics from the University of Essex, UK in 2010. He is the leader of the 2018 Ryukoku University Human Rights Project “Toward a University that Respects the Diversity of Sexual Orientation and Gender Identity.” He has been involved in raising awareness of LGBTQ rights through various activities at university. Ryukoku University received Gold at the PRIDE Index 2018 run by the nonprofit organization “work with Pride” in Japan. He edited and translated this volume.

At a Café in the Castro

September 16, 2018

Steps toward Marriage Equality

**Yoshimoto:** Talking about Japan, as of September 2018, 9 cities and wards in Japan issue same-sex partnership certificates, but the certificates have limited legal validation. With partnership certificates, couples can have hospital visitation rights, or if they contract with a monthly phone plan, they can have a family discount. But if they move out of the city or ward, the certificate is not effective anymore -- so they have limited legal power. Same-sex partnership certificates started in 2015 in Shibuya Ward in Tokyo, and recently major cities such as Sapporo, Fukuoka and Osaka started issuing them.<sup>1</sup> Gradually people's attitudes are changing, but I feel it's still far away to legalize same-sex marriage in Japan. Today, I want to know how same sex-marriage has been achieved in the US, about the process of achieving same sex-marriage.

**John:** I think we actually might want to start at the very beginning. In the US, the process of coming out is very important. Coming out in the US means taking what's inside of yourself, coming to terms with it for yourself, and then taking the step to first maybe tell your best friends, then other close friends, and finally taking the very brave step to tell your family. Telling your family is sometimes difficult because love of your family is something probably important to everybody around the world. Then, from that place,

the safety net, gay people then take the risk to tell their coworkers, their neighbors, and more and more people. Something that has happened in the US is that people began coming out in greater numbers in the 1970s with Harvey Milk,<sup>2</sup> who is most famous for his call, “Come out!”. And he famously said if everybody came out right now, we would end homophobia and discrimination in a second. But of course, it’s not that easy. It’s not that easy in the US. We understand, of course, it’s not that easy in Japan. We have different cultures in Japan and the US, but coming out can be a profound human experience in both cultures. It is a challenge both in America and Japan. But this happened slowly step by step, and it actually began slowly before Harvey Milk also. People were coming out in the 1960s and even in the 1950s. The first lesbian organization was founded here in San Francisco, by two women who were brave enough to come out, and they were brave enough to say, “We want other women who don’t even understand that they are gay, don’t even understand that there are other people like this, to have a place to meet.”<sup>3</sup> So this is a foundation. Then what happened was that as many people slowly started coming out, more and more people, just average everyday persons got to know gay people. The first intention for LGBTQ people to come out is that they want to be happy themselves. They have a secret inside them. And it is truly destroying them. Because holding your inclination to love another human being as a secret inside, for Americans, is very difficult to do. And it led to a lot of depression, a lot of very bad emotional experiences, and of course suicides too. Because people didn’t feel that they could be who they are. So they came out to be happy themselves,

and to be well. They started doing this as beneficial to themselves. But in the process of doing that, they told many people, and something that is magical about LGBTQ movement is that by people doing something that is very healthy for themselves, they ended up helping millions of other people at the same time. And to me, this relates very much to the core of Buddhism -- the wish to be happy in our lives, basic happiness, free from suffering and that in Buddhism we awake from suffering not just for ourselves but for the benefit of everyone. I think these are basic Mahayana principles, correct? The LGBTQ movement embodies this. Not in the name of Buddhism per se, but having to hide that you are gay causes great suffering for many LGBTQ people, and coming out lessens this suffering. But we can also benefit everybody by actually helping ourselves too in coming out. In the 1970s, speaking about gay men particularly, it was sexual liberation: to be able to actually act to be yourself, to connect romantically and sexually with partners. For lesbians, it was also connecting to the women's movement, to the sense of women actually being full human beings, respected equal human beings. I think there is an interesting parallel between LGBTQ people and women. In Japan also, women face struggles to being equal members of society. Common links. As gay people were seen more visibly in America, too often they were seen in a narrow way, for example, as a sexual person, or as a person who was funny, you know, as a person next door who has a wonderful sense of humor, or the great body, or great clothes. The television show: Queer Eye for the Straight Guy. But a tragedy happened in the US. The tragedy was HIV and AIDs that happened all around the world. But it

happened terribly in the US with gay men, and something changed drastically. Many gay people who had AIDS and were hiding their sexuality could not hide it anymore. So, it brought out more people coming out, revealing who they were. And the connection with families, sometimes were horrible -- some families rejected them but some families really cared for them.

**Stuart:** It also accessed in some ways America's sense of compassion for gay Americans for the first time. Gay men were deserving care, love and compassion.

**John:** Exactly. So, that is another pivotal step that happened. And profound learning took place within the gay community: how to care for each other, not the idea that you are just going to be friends who go to the parties, go to the bars, or sexual partners. We were in crisis. Nobody was helping us. People were dying very quickly. We learned to care for each other. It helped create in America the hospice ideal which is now becoming an ideal for everybody. America started to see gay people who were sick and dying as somebody that they had compassion for. It wasn't just they were the party people. They were human beings that we can feel for. And that grew over time, and another pivotal moment was The NAMES Project AIDS Memorial Quilt.<sup>4</sup> It just started as one little project, and then millions of people around the country did something that humanized gay people.

**Stuart:** So, each one of the quilt pieces represented the personal story of someone who had died of AIDS. Like the coming-out process, the quilt showed thousands and thousands of personal stories which reached out across the country and around the world to change hearts and minds.

**John:** Then, at the same time this was happening, a lot of gay women and men, especially lesbians, wanted to have children. They wanted to have families. And it is a very wrong stereotype that gay people don't want family. We actually love children. We love families. So, especially lesbians started having children. And these children were like any other children. From a pure perspective of protections for families, we needed marriage equality. These new gay LGBTQ families -- they needed protections in many important ways with respect to children -- with adoptions, with healthcare, with schools, all these things. And another very important thing is children themselves at school got to know each other, and they realized there were kids with straight parents and there were kids with gay parents or lesbian parents. And parents and children asked: Why should one child's family not be respected in the same way as another child's family? Why should one child have a second-class family? Do they not have the same protection, should there be a death of a parent or divorce? But they did not have the same dignity. Then, at the same time with gay men -- it was just one community at that point -- we all were saying, "Well, it is good that people have sympathy for a person with HIV or AIDS. But we really want to claim our full humanity in this society. The idea that I'm a fully loving person. I'm not just somebody to have sympathy for. Not just the person next door. I'm a full human being with full complexity. And I love, and I have committed relationships that you might not know about, because you don't see it on the media, you just see all the stereotypes." So, with these facts coming together, people started to say, "Hey, we want to have the right of freedom for full



marriage, we want our family, our love to be fully respected; most importantly, our love to be seen as equal to everybody else in love. And no human being loves another human being in a second-class way. No human being loves another person less than another human being loves another person.” This was the profound message from the LGBTQ community, and that’s why full marriage equality is very important here in the US, both for these protections we were talking about, for people with children, but also for individuals, like immigration rights and insurance. Health insurance in America is often based on family relationships. In the US, many things, over 1500 rights and responsibilities and benefits come with a marriage license. And the sense that as an LGBTQ person, my love is no less than anyone else’s love, and my dignity as a human being, the respect I deserve is fully equal to anybody else, and this is the way that we can live in our society together. So, these are the things that brought us to marriage equality. One last thing, that I think is something very interesting to talk about in the American LGBTQ movement is that probably everybody who is gay, I can almost say everyone, has struggled when they were young either as an elementary school student, a high school student, or a college student. We have had inner turmoil, a feeling that we will not be accepted. I know personally that this experience hurt me, because I remember at first I was too scared to come out and be myself, and I also know that if I didn’t, I will be destroyed inside. So, coming to that point, I and many others took the risk to come out. We said we have to do it. So many people in the movement want to make things better for young people. Because we know what it felt like to

be struggling when we were young. We don't want a young LGBTQ person to have to go through what we did. So, it's a beautiful motivation, and intention to try to make how we suffered not have to happen for others. So, that's a long answer!

**Yoshimoto:** You said that around Harvey Milk time people started coming out. I saw your website of Marriage Equality USA which talks about how to achieve marriage equality.<sup>5</sup> You need to educate the community, tell the stories, interact effectively with the media, but these come together with coming out. In a culture and society where it is very difficult for people to come out, how can we make marriage equality happen? I guess in Japan many people are afraid of coming out, afraid of being judged, and people still have strong stereotypes about gay men. So, my question is how marriage equality can be achieved without coming out.

**T.J.:** A lot of people I know of thought we would never see gay marriage in their life time. I thought I would be in my 60s when it happens, but it happened when I was 47. I figured all these older politicians go, and people get a little bit better every 10 years, and move forward, in my opinion. It's scary. People have to take a risk. I remember being 13-year-old kid, thinking about coming out to my family, then on the next day, Harvey Milk was shot. And I knew I was going to just hide myself. It's scary. People just have to take the chance. Put themselves out there. Their life may be different, but the way I look at it is sometimes we sacrifice things for ourselves, so we can move to the next generation forward.

**Keisuke:** I learned from the LGBT community in San Francisco that in Japan

there is so strong internalized homophobia.<sup>6</sup> There are silent voices, culturally and at the community level, the message that we cannot be different from the majority. That is such a huge pressure. And also, I was very afraid to come out as gay because a lot of teachers and classmates at my elementary, middle and high schools were saying a joke about homosexuality like connecting only with sexual activities; gay equals having sex with an anal and a penis, and that's all. I didn't learn anything about it at school. I was so afraid of being judged by others as a sexually very active boy in an immoral way. So, I kept internalized homophobia. I hated myself to be gay. Also including myself as HIV positive happening in my life, I hated myself more. Japanese people need a model to respect the full aspect of gay not just as sexual activities but as human dignity, that they live an ordinary life. It's kind of challenging because in Japan no one wants to be a target or be targeted, or to be different from the community.

**Yoshimoto:** The difference between the US and Japan is that Japan is more mono-culture than the US. Most Japanese people feel that we don't want to stand out from others. Not only about sexuality, but in any ways, we want to be like the others, like the majority people. I guess that's one of the big reasons why people don't want to come out in Japan.

**Stuart:** I'd just like to add that there is no right or wrong way to come out, just like there is no right or wrong way to be an activist, or to make change. Especially as an initial step, it is really important to come out in a way that is safe to you. For most people, telling every single person in their lives is not a good first step. It's too scary and not going to be safe. Probably the

better first step for most people would be to choose one person, one trusted person, someone that really cares about you and is non-judgmental, and tell that person -- then build a relationship where you can be who you really are with that person, and hopefully you can keep growing from there. I also think in America but also in other cultures, there are different ways to make change. People use the position where they are. Some people feel that they can be very open. So, in our culture it made a big difference when some people who have a lot of visibility came out like when Ellen DeGeneres came out.<sup>7</sup> That is the moment people really remember even now although much time has passed. But people are like I remember where I was when that episode of Ellen was on TV and when she was on the cover of Time magazine, saying "I'm gay." For many people, that was actually a pivotal moment of a different kind of openness in the culture. But for other people, maybe they actually can't come out publicly. But they can make changes in some small ways. Maybe they can influence the company where they work to make changes in their policy that will help their coworkers. Or maybe they have some influence in the neighborhood, or in a town. In America, there were lots of debates about whether we should be pursuing domestic partnerships/civil unions, or whether it should be marriage equality or nothing. And the people who preferred different strategies sometimes were not happy with each other. Some people said that if you accept the domestic partnership, then you are making it harder for us to get marriage. Then people who favored domestic partnership would say your all or nothing approach means that we are going to have nothing. But in reality, by people pursuing all these different

strategies, they were actually working toward the same goal of changing society. All of their efforts resulted in more awareness of LGBTQ lives and relationships. Something like Ellen's coming out and other high visibility moments, were kind of pushing things forward in a big way. I think it's true for the nation and certainly for us here in San Francisco that another big moment was when San Francisco Mayor Gavin Newsom opened the door of City Hall on February 12, 2004 and said you no longer need to be one man and one woman to be married. In fact, we don't even need to know your gender, you just need to be two human beings. That's the only requirement for marriage. These were the first marriage licenses issued in the US to same-sex couples. This was a worldwide news event, and those marriages went on for 30 days.<sup>8</sup> People came from not only all over the country, from 46 states, but from eight countries around the world, thinking that this might be the one chance in a lifetime to get married. People actually camped out overnight in the rain, thinking if they miss the chance, they may never get the marriage license. When John and I went to City Hall, we witnessed huge outpourings of love, and actually it wasn't just the couples who wanted to get married, but there were people who came to celebrate the couples who got married. In really an amazing way, we saw people at their best. Both couples and anonymous strangers who were just so moved by people doing everything they could to show their love. I remember one moment as we stood back and observed, and John said, "This is actually the next step in the coming-out process. This is not just coming out and saying, 'Guess what? I'm gay.' This is saying, 'I'm gay and this is who I love. I'm gay and this is how I form a

family. I'm gay and this is who I want to spend the rest of my life with.” Suddenly, our loving relationships became the image of our movement. Just as AIDS made a huge change in accessing for the first time the sense of compassion for gay people -- that you are worthy of our care and compassion. This, in a different way, accessed the America's sense that we want to celebrate with you, we are not just going to care for you being sick and dying, we actually love that you are getting married. We want to give you a wedding gift. That was a big change for America to experience that feeling that they are actually caring about you. Also, it was a big change for gay people, “Wait. You want to celebrate me? You are happy that I'm getting married?” People were really surprised. It was a really wonderful way for gay people, many of them for the first time sort of stepped into marriage.

### Traditional Weddings

**John:** The fun of our story of February 12, 2004 was that we had decided we wanted to get involved in the marriage equality movement. We had heard there was going to be a rally on the steps of San Francisco City Hall for marriage equality. The day was called National Freedom to Marry Day. Stuart could not go to the rally because he had a lunch meeting. I could go, so I went to the rally to get involved. When I got there, I learned that something incredible had just happened, that San Francisco has just opened the door to gay couples to get married. I was shocked and overwhelmed, like, “Oh my God” But I had a big problem. No Stuart! You can't get married by

yourself! We wanted to get married. And I didn't have a cell phone back then, so I was waiting for a pay phone to call Stuart before his lunch meeting. And a woman said, "Oh here, use my cell phone." She just gave me her cell phone. We were total strangers. But this sense of generosity and trust was just filling the city. Kindness is great. It makes you feel good. And it's contagious. So, I got Stuart on the phone.

**Stuart:** It was the most urgent panicked wedding proposal ever. John shouted: "You need to come to City Hall now! Come here now!" We really thought that this opportunity would stop at any moment, that the court would say, "Stop. Do not issue these marriage licenses." So, the time was very precious. That's why it was sort of panic.

**John:** Nobody had ever gotten married in a legal setting in the US ever before. When Stuart arrived, we went in. We showed up to get involved, and we got to be one of the first 10 couples to get married as a same-sex couple. Because we actually got involved. You know, we took that little step. We always tell students to get involved with what you care about. Whatever it is. Especially LGBTQ rights. Get involved. We had been together for 17 years. We have been together for 31 years now. When we heard, "By the virtue of the authority of the State of California, I pronounce you legally married," it was a transformative moment. Before I had felt there was part of me that was saying to myself you are always going to be second best as a gay person. That internalized homophobia, that sense of shame, even though I've been openly gay and out for many years, was still parts of me. There were negative messages that I was still holding. In the moment we got married,

the two of us were having our love respected, I realized this was the first time in my life that I felt I was an equal human being as a gay person.

**Keisuke:** Even when we went to the City Hall to get the marriage license, I assumed that they might give us a different color of marriage license.

**Stuart:** Like lavender.

**Keisuke:** It's totally the same. I was very surprised.

**John:** The most hilarious moment of February 12, 2004 was when as gay men the City gave us the pregnancy and family planning information they give to straight couples! Because they were doing exactly the same for gay couples as straight couples.

**Stuart:** Because they give it to everyone.

**John:** So, we laughed out loud. And we were saying to ourselves inside: "Yes, they are treating us just the same."

**Stuart:** I'm half Chinese, my mother is Chinese. So, we've done activism in America in the Asian American community. One thing we did was after our wedding at San Francisco City Hall, the next year for the Chinese Lunar New Year, we and other groups like the Gay Asian Pacific Alliance put a float in the new year parade to celebrate same-sex couples who got married in San Francisco City Hall from the Asian American community. This float was done with such great care to be completely culturally appropriate, respectful and beautiful. The outfits we wore were for formal traditional Chinese weddings. There was one important difference. There were two brides together, and two grooms together.

**John:** One little difference!



**Stuart:** At the beginning of the parade, the couples on the float, the group who organized it, and people walking together, we had a talk with each other. We didn't know how the community lining the parade route were going to respond to us. They may be happy, they may be silent, or they may be hostile. They might yell at us, they may throw things at us. We had to be prepared for everything. As we started down the parade route, we were going through San Francisco Chinatown, with little aunties lining the parade route. They could see our float coming, and see them looking, "Hmm, what is this float?" Then, they saw two brides and two grooms, and then the look of recognition, "Ohhh, that's what it's about." And they started cheering, "Yay!" with clapping hands. Not 100 percent. I would say 80 to 90 percent of people wanted to celebrate. Marriage equality is not about those other people over there, but it's your own sons and daughters, it's about your own cousins and neighbors, your extended families, people you care about, people you know from your own culture are getting married.

**Keisuke:** The acceptance by the community is very important aspect. Actually, that's why we chose to have a Buddhist wedding at my temple. I felt I was finally accepted by the community as a human being, not a second rank person, not a strange person. I'm also a human being. Also, it's OK to be a Buddhist. In Japan, Buddhist communities are associated with a patriotic system, and Buddhist monks with a hereditary right are assumed to be straight. Most organizations in Japan take it for granted, but it is really true? Living in the US, I'm not part of the patriotic system. But it's OK. I'm Buddhist and also gay, because the community accepted and celebrated it.

That's fine. About 200 people came to our wedding regardless of race, age, gender and religion. Member of the temple all said, "Congratulations! Omedeto!"

**T.J.:** The whole temple was very happy too. It's interesting. Few days before that, when I first met my future mother-in-law and sister-in-law and my niece and nephew, he was like, "OK, we have to tell them." Then, I go, "Tell them what?" and he said that I'm gay. "You have to tell them 10 minutes before I meet them?" "Uncle Keisuke is getting married. He is getting married to a man." And they said, "Can you do that?"

**Keisuke:** And my niece asked, "why?" She was 7 years old. I was so afraid to be out to children. My assumption in my brain said that gay relationship is a very sexual thing because I internalized that message in Japan so many times for almost 30 years. That's why I was thinking, "Is it OK to tell children? How can I tell children that I'm gay and getting married."

**T.J.:** I was like, "They are going to see it when we go up and married." But my niece was really great. We were trying not to hold each other's hands that day. At the end of the day, my niece comes around and grabbed our hands and goes, "You two love each other. You two need to hold hands." My niece and nephew were wonderful kids. They didn't phase them it at all that we are gay.

**Keisuke:** I think fortunately they had not experienced internalized homophobia yet.

**John:** Your story shows how deeply the two of you respect your family. You cared so much about how they would be. You were so caring to them. You

wanted them not to suffer. You wanted them to be OK. Of course, it cost you. But it showed tremendous respect to your family.

**Keisuke:** I also remember wondering how to say I'm gay to my aunt and my sister. A lot of people said, "That's OK. You can tell now, open your text message, open your phone." Everyone said so. But I was afraid if she said, "No," what should I do? Geographically Japan and the US are remote, so how should I respond to her rejection, if it happens. It didn't happen. But I was very afraid.

**John:** It is so beautiful to hear that your niece brought your hands together and joined them. It's part of family and love. Could you tell us more about how your family reacted once you told them that you are actually gay, Keisuke?

**Keisuke:** In 2006, my mom asked me, "Keisuke, do you have a relationship with male?" And I said, "No kidding, Mom." Then my mom said, "Seriously!" I avoided but at last I admitted that I had a long distance relationship with a boyfriend living in Kyoto. Then, she cried. She said, "Because you are lonely, you ran into gay relationship." At that point, she was not understanding the relationship between male and male. She expected it to be cured. Then she revealed to my father. Literally she outed my sexuality to my father in 2007 or 2008. I was told by my father's temple not to open my sexuality to the public including my sister and brother. My father was surprised by the reality that his son is gay. Also, I was experiencing hardship at the mother temple in Kyoto, and I was very upset. But, I wanted my relationship as gay to be admitted by others. I didn't want to tell a lie because it is very important to

me. I needed a lot of courage to say that I was getting married to T.J in 2015. I wrote a letter to my father but still I haven't received a response from him. But it is OK. I believe that is another style of compassion, not to judge, but keep it quiet. We had a Buddhist style of wedding. We respected our culture and traditional culture to fit in the community. That's why a lot of Japanese temple members accepted, some of them are definitely conservative. But as long as we are following the Buddhist tradition, he wore kimono and I wore Buddhist robe, and the conductor was the residence minister. Chanting happened as well.

**T.J.:** I wish the photographer got the picture of my mother-in-law when she saw me in kimono. Her expression was beautiful. We only told her the day before, and she was very excited. She thought I would be wearing a suit. We both wore kimonos for our wedding. We changed from western clothes for the reception. We had a little sake toast in the community hall. It's cute that kids from Dharma school made us two baseball caps, one like very male oriented and the other very bride oriented. It was cute. So, we put that on. I still have them.

### The Importance of Role Models and Sharing Personal Stories

**T.J.:** There are lots of different movements happening, the one that I remember came out around the same time with National Coming Out Day is Gay Money Day. Gay people put the money out there, and the community

on the day to see how much money they get from LGBTQ people. It's working well because it broke down the boundary like I don't know anybody gay, "Oh, wait a minute. You know me."

**Yoshimoto:** Can I ask what National Coming Out Day is?

**T.J.:** It's October 11th, it happens every year. It's about coming out. Coming out to your friends, to your family. It started out as a movement and slowly broke down the barriers. There is a little attempt to try to get recognition, and it's funny that people think that we are only species that have LGBTs, and there is a theory that humans aren't naturally LGBT. But every animal, species have LGBT, so how could we be the only species on the planet that are completely different.

**John:** I think it's documented in 1500 species of animals. And on National Coming Out Day, often schools have a week of LGBTQ programs, when openly gay students present their stories, and other students can ask questions, or guest speakers come and films are shown. Many of these things.

**Stuart:** What happened at the University of California, San Francisco is there is a time when people who have already come out tell their stories. So, people can hear, "How does that work for you? I'm ready to do that. But I want to learn from your example."

**T.J.:** I'd like to mention about coming out stories. Being HIV positive, I had to come out again. It's very similar process. When I worked with HIV positive people, it's like finding a safe space, you don't need to tell all your family at once. It's usually good to feel comfortable with yourself when you've got to come out to talk to these people.

**Keisuke:** Actually, that reminded me that I came out as being HIV positive after the wedding happened. I came out as gay, marriage, and lastly HIV positive in 2018.

**T.J.:** All of these things are taking some time, and it's combination of efforts and different sides of coming out.

**Keisuke:** After moving to San Francisco, I learned that models of people are very important in the coming out process. I went to San Francisco's AIDS foundation and I shared stories and experiences with other gay, bi and transgender men. I don't know their gender identities. But still they are struggling or they are very confident to be gay and HIV positive. It varies. Races are different. Ages are different. And their background is also different as to when and how they were infected with HIV. But still they listen, and I also listen to their stories. That made me comfortable. Without these models of people, I would have been feeling that I'm alone. I'm the only one to struggle with this: gay, Japanese and also HIV positive. Three burdens are on my shoulder. Once I get models that other people have similar experiences, and also sharing experiences. I think definitely that changed me.

**Yoshimoto:** That's a good point. My students often tell me that there is no role model in Japan. There is no Ellen DeGeneres, and celebrities in Japan do not come out. So, they can't picture the future, and that is a really scary thing for them. That's why I'm doing this, to present role models.

**John:** I think role models are extremely useful. When we were at a Japanese university giving talks about coming out and marriage equality, this university had a center where students could come and get support. There

was a student who wanted to speak to us privately. She was struggling with her sexuality. She really wanted to be able to tell her friends and family, and she was very scared of doing so. What we tried to do was listen. First of all, listen so that she could just say what her experience was. Tell what was true for her. As we listened, we thought about what we could say to her that could be helpful. What occurred to me was very simple. Just look at her and say, “You are beautiful, and you are great just the way you are. You don’t need to change.” It was a sort of magical moment -- I noticed as I said those words, tears flowed from her eyes. To me, it is universal that we have this internalized feeling that we are not OK, that we are second class. And you need to have somebody that is able to tell you or remind you that you are actually great, you are beautiful, your love is beautiful just the way you are. And you need to tell yourself this too. And the story was very lovely. She told her family. The next year, she was at Tokyo Rainbow Pride. She was there saying, “I’m OK.” She had joined the LGBTQ students group. She was in the process of building acceptance and confidence. The last time I was in Kyoto, when we were speaking last year in Osaka, I went to Manshu-in temple. I saw the Japanese proverb written there, “The post that sticks out from the ground gets pounded down.” But there was a second saying below it which I’d never heard of, “The post that does not stick out will eventually rot in the ground.” This is the universal challenge. We want to be part of the larger community and if we don’t take that risk, we hurt ourselves. In Japan, we believe some gay people told us the same message that we were talking about in the Chinese New Year Parade. We are taking a deep bow to the

culture and respect for the culture. We as LGBTQ people are also at the same time part of this culture. That being gay is not actually contrary to the culture as what you might think, even the American culture, Christianity and all that. Or saying in the Japanese culture, the tradition of being very conformist, we are actually part of that whole. And it's OK to stick out too a little bit. Being gay is a little different from the majority. And Japanese people told us that being different is something that many Japanese, not only LGBTQ people, struggle with. The truth is that a lot of people are a little different from what the shared idea that you have to be is. It's something that people can relate to in other ways. The film "Of Love and Law" talks about that in all sorts of different ways.<sup>9</sup>

**Keisuke:** Also, I'd like to emphasize that safety is very important. One of my Japanese friends also got married here in San Francisco. But when he came out to his parents, they tried to kill him. To come out to the community and society can be very risky sometimes. That's why I can't enforce all of gay people to come out.

**John:** Some Japanese people told us that very bad things can happen, like you suffered with your family lineage, but there is also fear. Fear can be worse than the reality. Fear certainly took over my mind. I was terrified about my family but they were accepting. It's important to try to understand when it's really fear that is not letting you become who you can be.

**Yoshimoto:** As Stuart said, it doesn't have to be family that you come out to. But it can be the person you can trust. And from this person, you can come out to other people. Then you can feel acceptance little by little.



**T.J.:** Going back to National Coming Out Day, I remember back in 80s, when I was in college, there was LGBT day where everybody in LGBT, straight and allies would wear a purple shirt. Supposedly nobody knew who is gay and who is straight. It was about other people building up visibility on campus. In Japan, I was totally shocked in Tokyo every man wears white shirt for work. So, it is like a little thing, even if it just starts up with a little pin badge.

**Stuart:** A pink triangle pin badge would work.<sup>10</sup>

**T.J.:** There are subtle things you can do. I also think role models are very important. When I was a kid, there were only two gay characters on TV. He was actually a straight man playing a very effeminate gay man so he could live with two girls for cheap rent, which was horrible. Once HIV and AIDs hit, every character, if you are lucky enough to have a character, there is no lesbian character on TV, there is a gay character that magically gets HIV and dies. They never had a relationship. They were always single. Because one bad sexual night or something, the full story is like that. Also, about coming out, related to fear, people have to be OK with the fact that there are going to be some people who reject them. Friends and family. And that's OK. We build family, what we call 'chosen family' which is stronger with all the people in your life.

**Stuart:** In Tokyo, one professor invited us to talk at her class. Then, she assigned her students next week to write their reaction. She sent them to us. We looked at one of the reactions, and it's clearly a coming-out story. After the student heard our talk, he decided to come out to the rest of the class as

ethnically Korean. He said that if these two married gay men came from America to talk to our class to tell us who they really are, then I can tell my classmates who I really am. And he had been able to pass in all this time because nobody realized he is ethnically Korean. There was no reason he had to come out. But he felt he was living a lie. He actually wanted to be who he really was. So, he told them. The professor said that the class was wonderful. It was just an example. But I like the story because to me students didn't hear a gay story from us, but they heard a broader message about authenticity in your life, and the ability of everybody to live a life to full potential as who they really are.

**John:** We two gave a talk together. What we hoped was because we are coming from an outside culture, we could talk very personally. Maybe it helped create a little bit of openness in the air, and people felt that maybe they could talk more personally. I learn from cross-cultural opportunities. It's a way of being a little bit more open.

**Keisuke:** I guess personal stories are very important to start a conversation. When I gave a talk at Ryukoku University in August 2017, a couple of questions came to my desk at the end. Some were about compatibility between Buddhist doctrine and same-sex marriage. It might be important, but rather than talking about academic stuff, I guess we need to speak and share personal experiences, otherwise the real voices are missing. That's my opinion.

## International Same-Sex Marriage

**T.J.:** Going back to marriage equality in Japan, I'm sure it can happen. I'm not sure if it happens as quickly as it did in the US. If you look at a movie like "Hafu",<sup>11</sup> it's even difficult for mixed races to find an apartment. There were a guy from Ethiopia and his Japanese-Korean wife. As soon as they find out he is African, they would not let them move in. For me, there is a lot of work to make it happen. But look what is happening in Taiwan. Taiwan is accepting same sex marriage, and it's an Asian country next to you. When I was over there, when we were holding hands, they looked at us. But as soon as they realized that I was gaijin, a foreigner, some people stared at me with hostility and some people didn't care about it and just turned away. Japanese people can be very direct sometimes, but it doesn't matter to me, as I knew I was not going to be robbed or mugged.

**John:** We as non-Japanese, have a sort of privilege when we are in Japan, as we are a guest, a white guest or mixed-race guest. When I've been to Japan myself, I tell everybody that I can that I'm gay. Because I want to learn what they say. I want to learn. I'm not living in Japan. It doesn't matter. And I know they don't have a gun. So, what can they do to me? It's been very interesting in a sense. I was at a restaurant in Kyoto. Long story short, there was a Japanese straight couple and me, and they asked me "What made you come to Japan?" And I said, "To talk about gay marriage." I remember the woman said with a big surprise, "Oh." I didn't say it over and over again, but it was clear that I have a husband. We started talking about tea ceremonies,

and they invited me for a tea ceremony at their house. At the end of the ceremony, the wife gave me a gift. It was funny. It was a female purse, and she said, “For your wife.” And her husband reminded her that I’m gay, and she said, “For your mother!” It’s an interesting thing. They have now met a gay person. Hopefully the next time, they will understand more and be a little different.

**Keisuke:** If we go back to Japan to take over the temple, I’m still an heir of the temple, T.J. cannot stay more than 3 months because of immigration rights.

**T.J.:** I guess we will be the first openly gay Buddhist temple in Japan.

**John:** There is openly gay Buddhist temple in Taipei. So why not?

**T.J.:** We met several other legacy people like Keisuke, who are gay and could stay in the closet to get married, so that they don’t want to bring shame on their family.

**John:** How does it feel that your legally married husband can only stay for 3 months in Japan?

**Keisuke:** Indignation. But my feelings are very ambivalent. I’m still holding fear. I don’t want to be rejected again by the Buddhist organization in Japan. I’m fearful of leading advocacy in Japan. I’m traumatized by harassment. For instance, I had to go to hostess clubs with male colleagues and got offers of several arranged marriage. Once one of the colleagues knew that I’m familiar with gay bars in Hiroshima, he kind of outed my sexuality to other people. Then I left. But here it’s different. The Buddhist Churches of America recognizes the diversity of gender identity and sexual orientation more as

human rights. They are more sensitive. I personally think that is because they experienced discrimination by the government as Japanese Americans. The history changed their attitude toward minorities.

**John:** In fact, the Japanese American Citizens League were the first non-gay organization in America, except for ACLU, American Civil Liberties Union, to support gay marriage. Because of actually what you said, knowing the feeling of being excluded and mistreated because of who you are. How does it feel emotionally? If you were straight and married a woman, she could come to Japan as your wife for a lifetime, right? Because he is a man and you are gay, T.J. has only 3 months rather than a lifetime. How does this feel personally?

**Keisuke:** Sad. Very sad. Even when I got married, I asked the consulate of Japan in San Francisco, “Can I change my passport name?” They said, “No. It’s not legal in Japan.”

**T.J.:** When we fly to Japan, he uses Japanese passport and when we come back he uses his green card to enter the US.

**Keisuke:** I think I’m not ready to advocate to the Japanese government. Sooner or later my father likes to retire, so I have to decide whether I stay here or go back with T.J.

**John:** But you are also quietly advocating simply by your personal stories. From what I hear, you are being asked to choose between your Japanese lineage, and your tradition, and your family for choosing being yourself. But you wish you could be both.

**Keisuke:** My family is accepting my marriage and sexuality, but it’s

questionable if Japanese communities in Japan would accept in the same way. They are not discriminating against by violence, but they are by keeping silent.

### What We Can Do at University

**Yoshimoto:** In the past 2 or 3 years, we have invited many speakers, and one of them is Keisuke. And the university now has 65 gender neutral restrooms on campus. We have a student LGBTQ group now. Our university made an official policy not to discriminate against people in terms of gender identity and sexual orientation. Do you think there is anything else the university can do for LGBTQ students, staff and faculty?

**Stuart:** I was thinking of some things that were successful ways to have visibility and safety at my university. I was a university student 34 years ago. There were activities that were appropriate for however out or not out you were. For example, if you were not out, something that could still be very helpful would be to have visible faculty member, who is not a role model like a celebrity like Ellen, but a role model like, “Oh look, here is somebody who is openly gay and has a job.” This is just one example. It was very helpful to me when I was a student that there was a gay faculty member. He published research on medieval same-sex marriage. The fact that he existed was a sort of comfort to me. Also, there were programs and issues that could be covered in student newspapers. I could be completely closeted, but I could read the student newspaper and see “Oh look, there are gay students on

campus.” Another thing that could be very safe would be to have a speaker. It might be publicized on newspapers or on posters on campus. Maybe you go and listen. Or maybe you are too scared to go. You just know that gay people are coming to speak. There are many things like that to raise visibility. There are all sorts of ways, big and small that you could participate. Also at my university for example there was a safe space where you could come and maybe meet other gay students or meet up with a counselor,<sup>12</sup> whatever it was, that would be considered more private and safe. There are other things for gay students as well, for example, like a book of the month club, like a discussion group. We could read a book and discuss what it means to us. There was a film series. More public things would be rallies and celebrations. We also did activism together. There were issues in the university health service and we wrote petitions and collected signatures. So that was very visible activity. Another thing we did was called “Gay Straight Discussion”. It was a discussion group where somebody who is willing to tell their stories as a gay person would come and tell their stories. There were both straight persons and gay people there to listen. People could ask questions to the gay student, like: “For you, what was it like growing up gay?” For the people who are speaking it is very visible activity. But gay people in the audience could just sit in the back and not say a word. Just observe. There are range of things that can be done at university, from very private to very public and somewhere in between.

**Keisuke:** As I experienced working at University of California, San Francisco, there was a long orientation about sexual harassment and gender

identity several times. I think cultivating sensitivity to diversity for new students and new employees is very important, so they raise awareness everyone is related to these issues. That's a small suggestion I give for Ryukoku University.

**John:** You can put on a badge that says you support LGBTQ people. It doesn't have to say "I am gay." Everybody supports LGBTQ people on National Coming Out Day. You could have a day on campus. You could have a special gay day where people show their support.

**Keisuke:** Before starting an internship at University of California, San Francisco, there was a mandatory online course. Without taking it, we cannot start working there. It would take 6 or 7 hours to finish the course on sexual harassment. Basically, we learn through the online course cases of lawsuits, and how both a petitioner and respondent reconcile.

**Stuart:** These are steps. In my university in the 1980s, there was a group of students who actively talked to the administration to adopt the official non-discrimination policy for the entire university to apply to staff in hiring and employment, to students, to campus life, and to academic life. When gay people first proposed it, people said this is a crazy idea, like this university will never do that, like you are wasting your time. But years later, the university did it.

### Same-Sex Marriage as Role Models

**Yoshimoto:** Do you think legalizing same-sex marriage is a good role model



for younger generations?

**John:** Yes. There was a study done in the US and published by Harvard and Johns Hopkins University.<sup>13</sup> It analyzed teenage suicide attempts. They found that in states that had full marriage equality in the US before the law became nationwide, there were 134000 fewer (7% fewer) suicide attempts by high school students. It goes back to the value of having dignity and respect and marriage equality, because it is equality under the law for your love that gives the sense of well-being for a young LGBTQ person, because they are not excluded because of who they are, and whom they love.

**Stuart:** When we first got married, we had been together for 17 years. It was very interesting the effect our marriage had on friends and family who had all known us for years as a couple. When we got married, something changed. They wanted to give us gifts. They wanted to celebrate us. They wanted to know what it meant to us. Some people said something that actually surprised us. My younger brother has known John for much of his life. When we got married, we were all sitting around the dinner table one day, and he stood up and walked over to John, and he said, “Oh my god, you are now my brother-in-law now. I have a brother-in-law.” And he gave him a big hug. We are now a family, even though my family had been very welcoming all those years. It made a very profound difference, not just to the couples getting married, but also to the people in their lives. I think people learned a lot about what it meant. Some people were very accepting, but they never had thought about what it means to be able to get married or not. Straight people really don’t think about it. It’s just something they do. Suddenly they would ask us,

“What rights and responsibilities do you get when you get married? We got married, but we don’t know what we get.” We would answer that there are 1,138 federal rights that come with marriage. We taught them about marriage. They have never thought what it means for gay friends that cannot get married. I feel that the entire country was learning by experiencing it. The opinion polls which show where the public agree or disagree of gay couples getting married. It has completely flipped from approximately 30% approval and 70% disapproval to almost 70% approval now nationwide. And it happened very quickly, and it actually happened because we were able to get married, so now people see: “Oh, my neighbor got married. My cousin got married. My uncle got married. My boss got married.” So, it’s like a fulfillment of this idea that Harvey Milk said if every gay person suddenly came out, discrimination would end. When LGBTQ people got married, everybody suddenly realized how many gay people they have in their lives. People hadn’t realized how many gay married people that they would have in their lives.

**Yoshimoto:** Once it was possible, it made it more visible.

**Stuart:** Yes, it made it more real.

**John:** And there are some hopes in Japan too that things could change quicker if some of the laws changes.

<sup>1</sup> この座談会が行われた 2018 年 9 月以降、群馬県大泉町と千葉市でも同様の制度が始まっている。

After this discussion was held in September 2018, Oizumi town in Gunma Prefecture and Chiba City started to issue similar same-sex partnership certificates.

<sup>2</sup> ハーヴェイ・ミルク: アメリカにおける LGBT ムーブメントを象徴する人物。70 年代に人権活動家として頭角を表し、77 年にサンフランシスコ市会議員に当選。ゲイであることをオープンにして当選した初の公職者となるが、翌 78 年、同僚議員によって暗殺された。彼の生涯を描いた 2008 年公開の映画「ミルク」(ガス・ヴァン・サント監督)は、作品賞を含むアカデミー賞 8 部門にノミネートされ、主演男優賞と脚本賞を受賞した。

Harvey Milk: A symbolic figure of American LGBT movement. He cut a figure in the 1970s as a human right activist, and became the first openly-gay official when elected to the San Francisco Board of Supervisors in 1977. In 1978, however, he was assassinated by his colleague. The 2008 Gas Van Sant film 'Milk' depicts his life, and was nominated for 8 categories at the 81st Academy Award including Best Picture, and won Best Actor in a Leading Role and Best Original Screenplay.

<sup>3</sup> Daughters of Bilitis: Del Martin と Phyllis Lyon によって 1955 年にサンフランシスコで創設された団体。カミングアウトすることを恐れる女性へのサポートや同性愛者やバイセクシュアルの人々の権利についての教育などを行っていた。

Daughters of Bilitis is an association founded by Del Martin and Phyllis Lyon in San Francisco in 1955. It supported women who were afraid to come out, and taught about the rights of lesbian, gay and bisexual people.

<sup>4</sup> The NAMES Project の AIDS メモリアルキルト: 1987 年にサンフランシスコで起こった運動で、現在では日本を含む世界中に広まっている。AIDS で亡くなった人々を偲び、残された家族や友人たちが故人の名前や思い出の小物などをキルトに縫い合わせていくという活動。

The NAMES Project's AIDS memorial quilts: It began as a movement in San Francisco in 1987 and spread all over the world including Japan. Commemorating the person who died of AIDS, their friends and families stitch the names and keepsakes into quilts.

<sup>5</sup> Marriage Equality USA: 1998 年に創設された NGO。全米に 4 万人以上の会員がいる。

Marriage Equality USA is an NGO founded in 1998, which has more than 40000 members in the US.

<sup>6</sup> 内在化されたホモフォビア: 異性愛を規範とする社会の中で人々の心の中に同性愛嫌悪 (ホモフォビア) が構造的に取り込まれてしまうこと。内在化されたホモフォビアが強いと、たとえ当事者であっても他の同性愛者に対して嫌悪感を抱いたり、自己嫌悪に陥ったり、自己肯定感の低さにつながったりする。

Internalized homophobia: In a hetero-normative society, people unconsciously have homophobia. If internalized homophobia is strong, even a gay person dislikes other gay people, and it may lead to self-hatred or low self-esteem.

<sup>7</sup> エレン・デジェネレス：アメリカのコメディアン・女優。スタンダップコメディアンとして人気を博し、トーク番組「エレンの部屋」や、アカデミー賞授与式の司会を2度務めたことでも知られる。1997年に自身の番組「Ellen」等において同性愛者であることをカミングアウトした。「あなたのカミングアウトは国を正しい方向に導いた」として、オバマ大統領より大統領勲章を授与された。パートナーはドラマ「アリーmy Love」でネル・ポーターを演じたポーシャ・デ・ロッシ。

Ellen DeGeneres: American comedian and actress. She became popular as a standup comedian, and is known for her talk show “The Ellen DeGeneres Show” and hosting two Academy Award ceremonies. She came out as lesbian on her show “Ellen” in 1997. She was awarded a Medal of Freedom by President Obama, saying her coming out “accelerated our nation’s constant drive into equality and acceptance for all.”

<sup>8</sup> その後2008年にカリフォルニア州最高裁が「同性結婚を認めないのは州憲法違反である」との判決を下すが、同年11月に同性結婚を禁止する「提案8号」についての住民投票が行われ、可決された。カリフォルニア州において同性結婚が承認されたのは2013年。アメリカのすべての州において同性結婚が承認されたのは2015年のこと。

Later the Supreme Court of California found that banning same-sex marriage violated states Constitution in 2008. From November same year to June 2013, however, same-sex marriage was halted due to Proposition 8, a state constitutional amendment barring same-sex marriage. It was in 2015 when same-sex marriage was legalized in all states of the US.

<sup>9</sup> 「愛と法」：公私ともにパートナーである南和行弁護士と吉田昌史弁護士の日常を3年間にわたり撮影した2018年公開のドキュメンタリー映画。生きづらさを抱えながらも自分らしさを求めて闘う人々が描かれている。

Of Love and Law: A 2018 documentary film depicting the lives of the Japanese gay lawyer couple: Kazuyuki Minami and Masafumi Yoshida. The film delineates various people living in present-day Japan who struggle to be true to themselves.

<sup>10</sup> ピンクのトライアングル：第二次世界大戦中、ナチスの強制収容所に入れられたゲイたちがつけさせられていたワッペン。

Pink triangle: A Nazi concentration camp badges for gay men.

<sup>11</sup> 「ハーフ」：2015年公開のドキュメンタリー映画。日本で「ハーフ」として生きる5人の当事者の姿に迫り、彼らの置かれた複雑な心境や立場を描き出している。

Hafu: A 2015 Japanese documentary film. It describes mixed feelings and positions of 5 racially mixed people living in present-day Japan.

<sup>12</sup> セーフ・スペース：主に教育機関などにおいて、差別や攻撃的な発言に直面することのない場所。アメリカでは、Queer Resource Center等の名称でLGBTQ学生のセ

フ・スペースを設置している大学がある。

Safe space: A space created for students who feel marginalized to come together and talk about their experiences without being discriminated against and judged. In the US, a safe space for LGBTQ students is often called Queer Resource Center.

<sup>13</sup> Raifman J, Moscoe E, Austin BS, McConnell M. 2017. Difference-in-Difference Analysis of the Association between State Same-Sex Marriage Policies and Adolescent Suicide Attempts. *JAMA pediatrics* 171 (4) :350–356.

大学生のための LGBTQ サバイバルブック Vol.2

それぞれの結婚のカタチ

発行日 2019年3月15日

執筆協力者 宮木 リー 啓輔  
Thomas Joseph Lee-Miyaki

Stuart Gaffney

John Lewis

吉本 圭佑

編集・翻訳 吉本 圭佑

発行 2018年度龍谷大学人権問題研究プロジェクト

問い合わせ 龍谷大学宗教部

〒612-8577

京都市伏見区深草塚本町 67

電話 075-642-1111(代表)

Fax 075-645-7939

LGBTQ Student Booklet Vol.2

Marriage for All People

Date of Publication March 15, 2019

Contributors Keisuke Lee-Miyaki  
Thomas Joseph Lee-Miyaki

Stuart Gaffney

John Lewis

Keisuke Yoshimoto

Editing・Translation Keisuke Yoshimoto

Published by 2018 Ryukoku University Human Rights Project

Inquiries Ryukoku University Religious Office

67 Tsukamoto-cho, Fukakusa

Fushimi-ku, Kyoto

612-8577 Japan

Tel: +81-(0)75-642-1111

Fax: +81-(0)75-645-7939

Copyright © 2019. 2018年度龍谷大学人権問題研究プロジェクト

2018 Ryukoku University Human Rights Project





RYUKOKU  
UNIVERSITY